２０１９年３月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「２０１９年度北海道地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０１９年度北海道地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、北海道クローズアップ「北海道　激動の平成～あの現場はいま～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、４月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	桐生　宇優	（北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「北海道　激動の平成～あの現場はいま～」
(総合　３月８日(金))について＞

○　平成が終わりを迎えるタイミングでの放送で大変いい企画だった。平成の北海道をクローズアップした番組を制作できるのはＮＨＫしかないのではないか。災害や災害に遭われた人々を中心に取り上げていたが、どのエピソードも見る人の心に残る話ばかりだった。ＮＨＫの災害番組は違和感なく視聴することができる。

○　人生を変えてしまうような災害に遭いながらも街の復興のために尽力した人、別の生き方を選んだ人、さまざまな人物に焦点を当てる構成は「北海道クローズアップ」ならではの訴求力があった。平成は戦争が無く平和な時代だったため、地震や台風といった自然災害に焦点を当てるのは必要なことだと思うが、番組を見て「平成は災害

の時代だ」という暗い印象を受けた。もう少し明るい話題も取り上げていれば、平成という時代を分かりやすく総括できたのではないか。最後はもう少し希望を持てるような締めくくりであれば、より訴求力があったと思う。

○　番組で取り上げていた一つ一つのテーマが、それ一つで番組や特集になる内容なので、一つの番組の中に収めると内容が薄くなってしまったことが残念だった。一方、北海道で発生したさまざまな災害が紹介されていたことで、実際に起こったことの振り返りにもなりよかった。北海道南西沖地震で一命を取り留めた三浦浩さんが、人を救うために消防士になり、その後、自身の経験を語り継いでいく語り部としての活動を懸命にしているという話は感慨深く、感動した。災害の話ばかりではなく、赤平市やロケット開発で成功している企業などの成功事例も紹介されておりよかった。３月は東日本大震災に関連した番組が多いため、「平成は災害の時代だった」という印象を受けるのはしかたがないのかもしれない。

○　北海道南西沖地震、有珠山噴火の事例では、被災の経験を社会に伝えることに身を捧げている人たちの現在の姿が深く印象に残った。また、過疎化・人口減少社会というパートでは、暗い話題になりがちな夕張市や赤平市の事例を過去のこととして紹介するだけでなく、厳しい状況の中でも自分たちにできることを模索し活動を続けているＮＰＯの理事や、ロケット開発で成長している企業なども紹介しており、その方々が語る姿は力強く感じた。今回の番組では過去につらい体験をしながらも、今も努力し続けている人が実際にいるということを伝えていて、希望を感じた。ただ、短い放送時間であるため、全体をふかんする視点がなく、個別の話題がどんどんと続くだけになっていた。平成に起こったことを今の視点でさらに見直すという構成はとてもいいと思うので、もっと時間をかけて掘り下げていったほうが北海道の平成はどのような時代だったかよくわかるのではないかと思った。また、平成という時代においては、日本全体の中で北海道がどのように位置づけられるのか、北海道が全国の中でどういう経験をした地域なのか、というもっと大きな視点から捉えることもしてほしかった。

○　「北海道クローズアップ」の過去の放送を掘り起こし、番組で取り上げた現場や人が今どうなっているかを伝えるという企画の趣旨は、とてもいいと思った。北海道南西沖地震の現場を伝える回から「北海道クローズアップ」が始まっているのも感慨深かった。しかし番組を視聴すると、「激動の平成」という力強く大きなタイトルから想像していたよりも地味な内容となっている感じもした。また、ふかんする視点で北海道の平成史を振り返る番組だと想像していたため、少しイメージと異なった。一つ一つのエピソードはとても印象的だったが、「激動の平成」というテーマで取り上げた３件のうち２件が自然災害だったためテーマに少し偏りがあると思った。昨年の北

海道胆振東部地震以降、道民の災害に対する意識は高まっているからこそ、奥尻や有珠山の話は別の機会に違う形で取り上げることもできたのではないか。また、夕張市の財政破綻から「第二の夕張」と危惧されていた赤平市の現在という内容も、夕張の破綻については誰でも知っているが、赤平も破綻の可能性があったという話はあまり認知されていないと思う。そのため、夕張で頑張り続けている人の過去と現在を見せたほうが、内容を理解しやすかったと思う。

○　災害と人口減少、自治体の危機というテーマを今の視点から見詰め直す内容で、見ていて得られるものがあった。番組を見て、災害はいつでもどこでも起こるということを改めて肝に銘じていかなければと感じた。いずれのテーマもとても興味深い内容だったうえ、災害と人口減少を２回に分けて放送できるぐらいの中身があったため、少し駆け足のようになってしまったのが残念だった。奥尻の元少年がなぜふるさとを出てまで語り部をしようと決意したのか。相当な覚悟があったと思うのでその背景も知りたかった。洞爺湖の復興ＮＰＯの方の人生、赤平のＮＰＯやものづくり企業の今後についてももっと深く知りたいと思った。

○　短い放送時間の中で、過去と現在を振り返るという構成はすばらしかったし、過去の映像も印象的だった。また、東日本大震災が発生した３月に違う災害の事例を取り上げることによって、また北海道でも起こり得るという防災意識を目覚めさせることができたのではないか。「激動の平成」というタイトルには少し違和感があったが、サブタイトルの「あの現場はいま」というのはすごくよかった。ＮＨＫの過去の映像の力はすばらしいので、今後も昔の映像と今の状況を大切にしながら番組作りをしてほしい。

○　２６年間続いている番組だけあって、１回の番組にこれまでの振り返りを詰め込むのはあまりにもったいないと思った。テーマ別に複数回に分けて振り返る形でもよかった。赤平の事例は、北海道の平成を振り返るというだけではなくて、これから市町村がまちづくりをしていくうえで何がポイントになるかを紹介しているとてもいいテーマだと思うので、もっと掘り下げたものをぜひ見てみたいと思った。今回の番組は、「北海道クローズアップ」を長く続けているからこそできた取材でとてもいいと思う。番組の中で最後の出演となった糸井羊司アナウンサーから挨拶があればよかったが、今回は直接現地取材しており、なじみのあるキャスターが現地に行っている映像は視聴者もより興味を持って視聴できるので大変よかった。

（ＮＨＫ側）

限られた放送時間で北海道の平成史を振り返ったため、駆け足過ぎてしまったかもしれない。大きなテーマを扱う際には複数回に分けて放送することも事前に検討したい。今後の参考にさせていただく。

＜放送番組一般について＞

○　２月２２日(金)の北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「厳寒もホッとあたたか　オホーツク」を見た。松浦武四郎とアイヌの人々の交流の記録に結びつけて番組を進行するという作りで飽きずに見ることができた。武四郎だけでなくその地域で知らなかったこともたくさんあり、おもしろいと思った。全体としてやや強引に武四郎のエピソードと結びつけていると感じる回もあったが、今回は番組の進行役であるオクラホマのやり取りが自然で、２人のやり取りと武四郎の話題が要所要所で違和感なくつながっており、結果的に武四郎の人柄にも触れることができた内容になっていた。

○　２月２３日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　特集ドキュメンタリー「いつもでない一日～北見北斗高校　第３７回強行遠足～」（総合 前 10:25～11:16 北海道ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。古いドキュメンタリー番組は見られる機会が少ないのでとても興味深く視聴した。７０キロに及ぶ高校の遠足を追うというかなり地味な内容だったが、現代の番組とは違う作りが新鮮だった。７０年代の高校生の素顔は自分たちのころとも今の子とも全然違っていておもしろかった。今後も古いドキュメンタリー番組を発掘してアンコール放送をしてほしい。

○　２月２３日(土)の「みんなで道フェス！２０１９～どさんこの夢　応援するべさ～」（総合 後 2:00～3:00 北海道ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。北海道が一つにまとまるような本当にいい番組だった。具体的に何かを伝える番組ではなかったが、結果として見た人たちには必ず何かが伝わる、夢と希望のある番組だった。何年かに一度はこのようなお祭り的な番組があってもいい。各局の女性アナウンサーが一つの画面の中にいるというのがすごく不思議な感じで、おもしろかった。

○　チャンネルを替えてもＥテレ以外は同じ番組が流れているという、日常を突き破るような事態に特別な高揚感があった。生放送でこれまでにない取り組みをするためにはさまざまな準備や苦労があったと思うが、テレビ局のチャレンジを見ることができとてもよかった。番組の中で歌われていた歌がこの後どういうふうに歌い継がれていくのか、何十年後かに振り返って見てみたいと感じた。

○　放送局側からすると全局同時生放送は画期的な試みであったからか、番組の中で司会が何度も「すごい番組」「夢のような番組」とあおっていたが、視聴者にとってはどうなのだろうという疑問が終始あった。新聞のラ・テ欄も含めてもの珍しさはあったが、「夢のような」と言うほどだったのかは疑問だ。また、「夢」という全体のテーマも大き過ぎたため、もう少し具体的なテーマがあったほうが盛り上がったと思う。民放との連携は災害時などにもうまく活用できるのかもしれないので、この番組をとっかかりにしてほしいと期待している。

○　制作サイドの情熱がものすごく伝わってきた。全局同時生放送は初めての試みなので、さまざまな意見があると思うが、今回はこのチャレンジをしたということ自体がすばらしいと感じている。制作に大変な苦労があったからこその熱量が画面から伝わってきて、チャレンジする姿勢に勇気をもらった。各放送局の女性アナウンサーが同時に出てきたが、目新しさとぜいたくな感じを受けた。災害など緊急時にも活用できる連携だと感じたので、今後もぜひ続けていただきたい。

○　災害があったときにお互いに情報を共有できるような体制を整えていくためにも、全局同時生放送という試みはいいと思う。

○　３月１日(金)北海道クローズアップ「追い込まれる外国人技能実習生」を見た。どれだけ非人間的なことが行われているのかということが具体的によく伝わってきた。解雇、低賃金、契約という経済上の問題だけでは無く、働いている人たちの孤立という心の問題にも踏み込んでいていい視点だと感じた。また、ゲストの神戸大学の斉藤善久准教授の解説はとても分かりやすく、いい人を起用したなと感心した。ただ、外国人技能実習生の死因の中で、溺死が病気と事故死に次いで多かったが、溺死というのは一体どういうことなのか。なぜ多数の人がおぼれ死ぬのか疑問に残ったのでその点に触れてほしかった。もう一つ、ベトナム人僧侶が「ベトナムの人は自殺の習慣がない」と言っていたが「自殺の習慣がない」というのは宗教上の問題なのかそれとも性格に起因することなのか。そうしたところにも触れていれば、外国人技能実習生が自殺するのは異常だということがより視聴者に伝わったと思う。

（ＮＨＫ側）

私たちも一番引っかかったのは、死因の要素としてなぜ溺死があるのかということだ。漁業実習中の溺死だったら理解できるが、そうでないところで働いているのに溺死しているという現実に直面した。この点は引き続き調べたい。

○　３月１６日(土)の知っとく北海道「今日はとことん！道南・渡島エリア～福島町・森町～」(総合 前 10:25～11:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。初回から何回か見ているが回を重ねるごとにこなれてきて、観光情報、地元の人たちの活動の様子、バラエティーとしての明るさが非常にバランスの取れている番組になってきていると思う。森町の「クルーズキッチン」というバスで豪華な食事ができるという話や、福島町の漁船クルーズが紹介されていたが、どちらもとても魅力的だ。特に漁船クルーズについては、海底が見えるグラスボートが完成する４月以降にぜひ行ってみたい。

○　「知っとく北海道」を公開放送の現場に行って見た。本当に楽しく、回を重ねるごとに番組はよくなっている。これから観光の時期でもあり、いいタイミングでの放送だった。

○　３月１１日（月）ＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”　拝啓　二十歳の自分へ」(総合 後 8:00～8:43)を見た。震災直後、小学校６年生だった子どもたちが二十歳になって当時埋めたタイムカプセルをあけ、８年後の自分たちに向けた手紙と向き合うという番組だったが、災害の直接的な映像ではなく、震災から８年たって個人に焦点を当てるというように伝え方がシフトしてきていると感じた。災害に遭われた方はその後大きく人生が変わっていると思うので、その方々を今後もずっと継続して取材していくことが、ＮＨＫの本分ではないかと思う。

○　２月２２日（金）「ほっとニュース北海道」を見た。前日の大きな地震で帰宅が困難になった人々が多数いたことを取り上げていたが、なぜ帰宅できない人がたくさんいたのかという疑問に対して、すぐに翌日夕方のニュースでさまざまな角度から分かりやすく明らかにしていたのでよかった。

○　３月６日（水）「ほっとニュース北海道」を見た。北海道胆振東部地震から半年がたち、復興に向けて頑張る人々の姿を追っていた中に、和菓子作りを再開しようとしているおばあさんの姿があった。以前にも番組で取り上げられていたおばあさんだったため、その後の様子を見ることができすごくうれしかった。ふだんはニュースを見て「よかったな」と思うことはあまりないが、取材相手のその後もしっかりと追いかけて取材を継続していると、視聴者のハートに届くということがよく分かった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１９年２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日（水）、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について報告があった。次に、「２０１９年度北海道地方向け地域放送番組編集計画（案）」の諮問の説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般について、活発に意見の交換を行った。最後に、３月の番組編成、放送番組モニター報告と視聴者意向報告の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　最近、ＮＨＫの番組には再放送が多いように感じている。編集し直して再放送ではなく新しい番組という形で放送するケースもあると思うが、ＮＨＫとしてはどのように捉えているのか。

（ＮＨＫ側）

再放送をすることでやみくもに放送回数を増やそうと思っているわけではなく、時間帯や放送するチャンネル、メディアを変えることで、視聴者が番組を見ることができる機会をできるだけ増やしたい、という思いがある。また、放送後に話題になり「わたしも見たかった」という声もいただくので、それらの声に応える機会という意図もある。

（ＮＨＫ側）

例えば「ＮＨＫスペシャル」など時間と予算をかけて制作したものが本放送と再放送だけでは「もったいない」という声もいただいているので、放送できなかった内容を入れて再構成し長時間版としてＢＳ１で放送したりもしている。編集の基本計画の中にも書いている経営資源の有効活用という意味もある。

○　「地球環境や気候変動にも配慮した、働きがいがあり、経済成長も遂げられる持続可能な世界をどう創るのか。視聴者のみなさまとともに、じっくりと考えていきます」という文章は、本当によく練り上げられており、すばらしい。まさにこの時代に必要なことだと思うので、番組を見ている視聴者一人一人がこれを達成できるように取り組める情報を、今後も発信してほしい。

＜「２０１９年度北海道地方向け地域放送番組編集計画(案)」について＞

○　北海道では４月に知事選挙が実施される。道民がどう知事を選んでいくべきか、論点は何なのかなど、視聴者一人一人の選択に資するような番組を作ってほしい。アイヌや北方領土、人口減少なども各局のテーマとして大きく挙げられているが、北海道から全国に発信すべきテーマはたくさんある。北海道から全国に向けた番組を 2019 年度もたくさん制作してほしい。

○　北見放送局の編集計画に「ラグビーワールドカップ２０１９」を積極的に取り上げ応援するとある。ラグビー日本代表の事前キャンプ地になっている網走の魅力を全国に発信するとともに、ラグビー自体の魅力も伝えてほしい。

○　地域の放送局が制作した番組で好評なものについてはＮＨＫオンデマンドで視聴できる仕組みを作って欲しい。ＮＨＫオンデマンドで全国の放送局の番組が見られれば「地域に密着したＮＨＫ」という意味合いも強くなる。より多くの人に番組を見てもらうこともできるので、ぜひ検討してもらいたい。

○　諮問された「２０１９年度北海道地方向け地域放送番組編集計画（案)」については、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月１８日(金)北海道クローズアップ「私はどこの誰なのか～戦争孤児　ルーツを探す旅～」を見た。高齢になってから、自分がどこの誰なのかを知りたいと願う谷平仄子さんの様子を見て、いろいろと考えさせられ何回も涙が出た。とてもすばらしいドキュメンタリー番組だった。

○　自分の出生のルーツがわからないことは戦後生まれの母親から生まれてきた私には全く想像できず、どんな気持ちなのだろうと思って見ていた。番組は仄子さんの心情に寄り添いながら静かに淡々と進行していたが、その過程に制作者の優しさが強く伝わってきて、とてもいい番組になっていると思った。本当にわずかだが、ルーツの手がかりが見つかり、仄子さんの感情が前向きになっていくシーンもあり非常に共感した。戦後７４年たった今、仄子さんのような境遇の人物を番組で取り上げてくれたことに感謝したい。

○　番組を見て、終戦後の十数年間、日本がどういう状況だったのかということを考えさせられた。終戦後、街に戦争孤児があふれていて、亡くなっていても不思議ではない人が、教師になってその職を勤め上げて、穏やかに一軒家で暮らしている。終戦後の混乱で亡くなる人もいる一方、仄子さんは、戦後の高度成長が終わった後に充実した人生を送られた。この分かれ目は何だろうと番組を見ながら考えさせられた。また、ナレーションからは仄子さんのそばで一緒にお母さんを探してあげているような思いが伝わり、とてもいい雰囲気だった。

○　派手な発見がないのに戦争の悲惨や大変さがしみじみと伝わるドキュメンタリーだった。何より今一緒にこの時間を生きている人が戦後に悲惨な経験をしているということにリアリティーが感じられ、自分がいかに恵まれているかということを改めて感じさせられたすばらしい番組だった。

○　１月２５日(金)北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「いにしえの道にぬくもり探して～旭川・富良野～」を見た。武四郎の北海道での足跡が今の時代にどのようにつながっているのか、これまでの番組以上に掘り下げて作られていたという印象を受け、武四郎に親しみを感じることができた。

○　旅人の音尾琢真さんは旭川出身ということもあり旭川への愛着が伝わってきてとてもよかった。番組で紹介された武四郎とアイヌの人々の交流、和人とアイヌの人々の交流というものに一本軸が通っていて、番組としてもまとまりがよく、飽きずに見ることができた。ただ、「トカチ越」というキーワードが番組の序盤から何度も繰り返し登場していたにもかかわらず、番組では山に少し入っただけで、実際に「トカチ越」をしなかった点については少し拍子抜けした。

○　音尾さんが旭川になじみが深いということで、自然に話し始めて番組が始まったのがとても気持ちよかった。大雪山連峰の雄大な映像や美瑛町の丘の映像などが随所に映し出されておりとてもよかった。私には見慣れている風景だが、武四郎は風景を見て感激し、「四方眺望よし」という言葉を残して、360 度のパノラマで絵を描いたことに私は非常に感動した。また、武四郎の旅のスケール感、大きさがわかるとともに、アイヌの人々がいなければ旅することができなかったということを改めて理解できた。武四郎が切り開いたアイヌとの交流のおかげで、その後もアイヌと和人との交流が続いたということもわかり、短い番組の中でもまとまりがよく、分かりやすい好印象の番組だった。

○　武四郎の旅の足跡をきちんと紹介しつつも、音尾さんのキャラクターもよく出ていて、バランスがよかった。「トカチ越」をしなかった点については他の委員と同じで拍子抜けしたが、番組全体としてはとてもいい味わいだったと思う。

○　２月１日(金)北海道クローズアップ「“雪氷津波”の脅威～冬の地震から命を守れ～」を見た。普段はあまり思い至らない北海道で冬に発生する震災について取り上げていてとても勉強になった。番組冒頭でのスタジオの中で流氷の大きさを表現した模型のシーンはとてもインパクトがあった。また、過去の事例や実験の様子を通して「雪氷津波」について理解できた。津波のない地域でも冬に発生する震災に対してどのような備えが必要かということをさまざまな角度から伝えていてよかった。ただ、例えば札幌のような大都市で冬に地震があったときに個人でどんな備えが必要かということをより具体的に示せていたらなおよかった。個人でどんなことに気をつけたらいいのか、個人が実践すべき具体的な災害への取り組みを知りたいと思った。

○　番組の最初に映った実物大の流氷の模型はとても迫力とインパクトがあり、番組のつかみとしてはとてもよかった。また、普段は糸井羊司アナウンサーと専門家の組み合わせで番組を進行することが多いが、今回は浅野里香アナウンサーも出演することで、スタジオににぎやかさが出ていた。浅野アナウンサーはスタジオをぱっと明るくするような華があり、ナレーションも落ち着いていてとても耳なじみがよく好印象だ

った。「雪氷津波」は内陸では発生しない災害だが、河川の危険性といった道内のほぼ全域に関係がある話も取り上げられており、とてもよい構成だった。さらに、ハザードマップを自分の１日の行動パターンに合わせて見直したほうがいいという話は参考になったので、ぜひ実践したい。

○　内陸部の人たちと海岸部の人たちで地震に対する捉え方が違うと思うが、雪崩や川沿いの雪・氷は地震が発生すると浮いて襲ってくるという点はどこに住んでいても同じことなので、大事なことを知ることができた。

○　雪氷津波についての詳しい研究は東日本大震災の後に始まった新しいテーマであるため、この内容で２５分の番組を制作できないだろうと思っていたが、番組の後半は冬の災害に関するさまざまな話が出てきて、内容の整理ができていないと感じた。そのため、印象に残らない部分もあった。また、「災害が発生する」という意味だと思うが番組中で出てきた「発災」という言葉はなじみのないものだった。

○　北海道胆振東部地震の記憶が徐々に薄れる中、当時これが冬の時期に発生したらどうなるだろうと考えたことを思い起こした。改めて自分がどのように行動したらいいかを見直すきっかけとしてこのテーマはよかった。「雪氷津波」という言葉は聞いたことが無かったが、どのような災害か想像ができる、インパクトのあるタイトルでとてもよかったと思う。番組冒頭の模型もわかりやすくてよかった。

○　糸井アナウンサーが番組の最後に「もう備えをするのをやめていませんか」と言っていたが、まさにその通りだと思った。「北海道クローズアップ」だけでなくいろいろな番組で、どう備えていけばいいか、どうしなくてはいけないかということを今後も伝えていってほしい。番組の中で段ボールベッドを紹介していたが、冬にだけ効果を発揮するような印象を受けた。実際には季節を問わず非常に効果的なものなので、普及するようにしっかりと伝えていってほしい。

（ＮＨＫ側）

「冬季の災害」ということをテーマに番組を制作することは以前から考えていた。今後も減災報道については、「北海道クローズアップ」のみならずインターネットでの展開を含めて、さまざまな手法で具体的に伝えていきたいと考えている。

○　２月２日(土)知っとく北海道「今日はとことん！オホーツクエリア～紋別・遠軽～」(総合 前 10:25～11:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。遠軽のジャガイモや犬ぞりの話、そし

て地味なロックバレースキー場に地元の人間も知らない特徴があったのかと思わせることなどいろいろな情報が出てきて、リアルタイムでしかも家族そろって見ていたが、リモコンのボタンを押すのが楽しかった。全般的によく取材していたと思う。ガリンコ号については十分に知っているつもりであったが、ガリンコ号が黙々と動いていく場面に家族で感動した。地元に住んでいると、冬にガリンコ号に乗りに行く機会はなかなかないが、番組を見て来年は乗りに行きたいと思った。

○　２月８日(金)いくぞ～！北の出会い旅「がんばれ北海道！被災地で見つけた元気な笑顔」(総合 後7:30～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。被災したハスカップ農家の畑に出演者が訪ねていたが、被災地の状況を実際に見ると話で聞いているのとはまた違う現実も見えてきて、改めて被害の大きさに驚いた。また、農家の苦労やハスカップ栽培への思い、復興に向けて頑張っている姿を知ることができた。また、番組を通してこの地でハスカップがどのように作られているのかを知り、地域の新しい面を知ることができた。旅番組のため、報道番組で伝えられている以外の別の角度で被災地の様子を取り上げていた。そのため、報道番組では知ることができない被災地の様子を知ることができ、非常によかった。

○　大泉さんが北島さんからとても上手く言葉を引き出しており、北島さんの経験や考えがよく語られていて面白い番組だった。有名人同士の対談というのはそう簡単には設定できないと思うが、北海道のことを大切にしながら活躍しているさまざまな分野の人の対談番組の制作を希望する。

（ＮＨＫ側）

「いくぞ～！北の出会い旅」でねらっているのは、思いつき、アポなしで行き、そこで起こることを楽しんでもらうという点だ。被災地の状況と番組内容について慎重に検討した結果、撮影自体もかなり延期した。難しい状況ではあったが、吉幾三さんにも一生懸命に取り組んで頂いた。

○　この番組に限らず、さまざまな番組で北海道胆振東部地震の影響が現在どうなっているのかということを取り上げる姿勢はすばらしい。番組で取り上げること自体が被災された方々の力になると改めて感じた。吉さんが被災者の心情が癒えていない時期に被災地に行くことはいいのかどうかを慎重に検討されたということだが、全く違和感がなかったし、現地の方々もとても喜んでいるように感じた。今後も被災された方々の心情に寄り添った番組作りに努めていただきたいと、強く希望する。

○　吉さんと星麻琴アナウンサーのコンビは、お互いの役割がうまくこなれてきている。星アナウンサーは大事な場面で吉さんをしっかりとフォローしていて番組になくてはならない存在だ。この番組に限らないが被災地に誰かが行って何かをしたときに、「元気をもらった」みたいな言葉をお約束のように締めに使うのは、いつも気にかかっている。その点、吉さんの「普通どおりに」といった感じの言葉が最後にフォローとして出てきたのは大変よかった。

○　２月１５日（金）北海道クローズアップ「岐路に立つ“農業王国”～動き出したＴＰＰ・ＥＰＡ～」を見た。ＴＰＰやＥＰＡといった難しい内容を含んだ番組だったが、分かりやすく伝えていた。番組の冒頭で専門家のゲストが、農産物が外国から入ってくるとマーケットを奪われることが問題なのだと明確に言っていたのがよかったと思う。その点をもっと掘り下げてほしかった。番組で影響の大きな会社や先進的な取り組みをしている農家を取り上げていたのはよかったが、番組全体として「農家の問題である」という印象を与えてしまったのではないか。消費者の「安くなって嬉しい」という声が取り上げられていたが、実際には国産のモノの値段が上がるという問題もあるので、一概に消費者にとって喜ばしいこととはいえない。消費者が自らにどういう影響があるのか、どう行動していったらいいのか、農家だけが頑張ればいい問題ではないということも問題提起しているとよかった。

（ＮＨＫ側）

「農家側の問題に見える」ということについて、番組内では「消費者が何を選ぶのか」にも触れてはいたが、時間をかけてＶＴＲで紹介している方々が農家であり企業であったため、その印象が強くなってしまったのではないかと思う。この問題は北海道にとっては特に大きな問題なので、今後も気を付けながら扱っていきたい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１９年１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、若泉札幌局長と佐藤北見局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道スペシャル「シャーロットの北海道紀行！～イザベラ・バードの道～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、２月の番組編成について高木放送部長から、放送番組モニター報告について中田副局長から、視聴者意向について竹本広報・事業部長から、それぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	(函館市地域交流まちづくりセンター　センター長)
副委員長	井田芙美子	((株)いただきますカンパニー　代表取締役)
委　　員	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	桐生　宇優	(北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	蛭田　亜紗子	(小説家)
	村田　博	((株)村田商店　代表取締役)
	柳谷　君予	(NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ)
	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)

（主な発言）

＜北海道スペシャル「シャーロットの北海道紀行！～イザベラ・バードの道～
(総合　１月１１日(金) 後 8:00～8:42)について＞

○　イザベラ･バードが実際に旅をした函館から平取までの足跡は丁寧に説明されていたが、バードについての紹介が番組内でほとんどされなかったため、バードの人物像や北海道を旅した目的があまりわからなかった。そのため、一般的な旅番組のような印象を受けた。また、番組の終盤で出演者のシャーロット・ケイト・フォックスさんが涙したシーンがあったが、涙した背景についての説明が無かったため、唐突な印象を受け、共感できなかった。

○　バードが北海道に来た当時の風景を紹介しながらバードの足跡を実際にたどる演出だったため、当時と現在を比較することができ、楽しく見ることができた。番組の

中でところどころ紹介されたバードにゆかりのある観光スポットには実際に行ってみたいと思った。ただ、バードと直接関係ないものが番組内で紹介されたことに違和感があった。また、バードが北海道を旅した際に感じた思いを番組の中でしっかりと掘り下げられていなかったため、シャーロットさんが「イザベラ・バードの気持ちが分かった」と言って涙した理由を理解できなかった。バードが北海道を旅した理由については番組冒頭で「アイヌの人々に会いに来た」と説明されていたが、なぜアイヌの人々に会いに来たのかというところまで掘り下げて説明してほしかった。

○　バードの旅の足跡を、出演者が楽しみながらたどるというバラエティー的な演出で、番組全体としては飽きずに見られたが、バードについて紹介する内容がもっとあってよかった。また、アイヌの料理に欠かせないニリンソウやサケといった食材が番組中で取り上げられていたが、アイヌの料理や食材についてはさまざまなエピソードがあるため、そうしたエピソードを番組内でも取り上げることで深みのある番組にしてほしかった。

○ バードと同じ外国人の女性であるシャーロットさんが、バードの旅の足跡をたどるという演出はとても面白かった。当時、言葉も通じないような大変な状況の中でアイヌの人々に会いに行くというバードの熱意を想像することはできたが、バードがどうしてアイヌの人たちに会いたかったのか、会って目的が達成されたのか、アイヌの人たちについて書いた著述がどのように評価されたのか、そういった点をもっと知りたかった。

（ＮＨＫ側）

イザベラ・バードという歴史上の人物の北海道での足跡を歴史的にたどっていくだけでは、面白さや楽しさという点が希薄になるため、「マッサン」で北海道にゆかりがあり同じ外国人女性のシャーロットさんに旅をしてもらうというバラエティー的な要素を織り交ぜて番組を構成した。そのため、イザベラ・バードという人物や、旅の目的について深掘りが足りなくなってしまったかもしれない。シャーロットさんは日本語をほとんど話せない状態で日本に来て、その頃からバードの本を読んでいたそうだ。1870 年代に北海道についての情報をほとんど持ち合わせていないイギリス人女性が日本で旅をするという挑戦が、シャーロットさん自身の経験と重なり、それが番組最後の涙につながったのだと思う。こうした背景も番組の中で出せればよかった。

○　もともとシャーロットさんがバードについて思い入れがあったということだが、そ

の背景を知って番組を見ると、番組から受ける印象がだいぶ変わるため、とても大事なことだったのではないか。バードがなぜアイヌに興味を持ったのか、なぜアイヌの人たちに会いたかったのかという説明も必要だった。

○　バードの旅路をシャーロットさんがたどることで、二人の外国人女性の冒険を対比してその旅路に思いをはせるというのは、よくできた企画だと思った。シャーロットさんがもともとバードに思い入れがあったというのはとてもいいエピソードなので、番組の中で取り上げてほしかった。バードの荷物のリストが紹介されていたが、ベッドなどかなり大きなものが入っていたことに驚いた。バードは実際には何人で旅をし、どういう服装でどのように荷物を運んだのかという点がとても気になったので、バードの旅をもっと具体的に想像できる仕掛けがあったほうがよかった。撮影時期はおそらく、秋の終わりごろかと思うが、紅葉が終わっていて風景が寂しく、少し残念に思った。

○　バードを全く知らない人間からすると、バードがなぜ北海道に来たのかという点をもっと知りたかった。先ほどシャーロットさんがバードに対して思い入れがあったというエピソードを聞いたが、これを番組で取り上げなかったことは大変もったいないと思う。ただ、バラエティー要素のある旅番組としては、シャーロットさんの可愛らしさが魅力的で、出演者同士の掛け合いも要所要所に入っていて楽しく見ることができた。また、バードがお風呂を持って旅をしていたという話は非常に面白く、５０キロある荷物をどのように運んでいたのか、西洋の女性はふだんからそういう旅をしていたのか、そのあたりも深掘りしてほしかった。

○　バードの旅行記をシャーロットさんが流ちょうな英語で読み上げていたが、バードが当時の北海道の風景を見て感じたことを、同じ外国人女性であるシャーロットさんはどう感じたのか。バードの目線とシャーロットさんの目線でそれぞれどのように北海道の風景が映ったのかを見せてほしかった。140 年前と変わらない風景が残っているのは北海道の財産だと番組でも触れられていたが、これからも、番組制作を通じて北海道の魅力をもっと出していってほしい。

○　シャーロットさんがチャーミングで、最後まで可愛らしいと思いながら見ていた。また、とても美しい英語を話すので、バードの著書を読む姿やナレーションも大変心地よく聞くことができた。バードがなぜ北海道に来たのかという説明は不十分で残念だったが、バードがどのように北海道を旅したのかという点を表現しようとする努力は伝わり、限られた時間の中では十分だったと思う。旅行時の持ち物や移動手段についての紹介や、バードが歩行するのに難渋したであろう地点を実際に見てみるなどの

描写から、当時の様子を想像することができた。ただ、シャーロットさんが番組の最後で涙した理由がわからず、唐突だと感じた。今回に限らず、この番組をなぜこのタイミングでやるのか、なぜその出演者でやるのかという理由などもしっかりと視聴者に伝えると、より納得して番組を見ることができると思う。

○　外国の女性が日本を旅するという点で、今回案内役としてシャーロットさんは適任だった。バードが旅した当時の北海道がどんな状況だったのか、あるいは当時、外国の女性が日本に来ることがどれぐらい珍しいことだったのか、外国を旅する人がたくさんいたのかなどの時代背景も知りたかった。また、バードが旅した日時や番組内で紹介されている当時の写真について具体的な日時の説明や記載もほしかった。

（ＮＨＫ側）

イザベラ・バードは魅力的で興味深い人物だ。今後も継続して取材したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月５日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　聖火のキセキ「北海道　岡崎朋美　聖火ランナーの奇跡に感動」(総合 前 10:25～10:50 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。まず、女子スキー競技において日本で初めてオリンピック出場を果たした選手を育てたのが、地方のゴム長靴製造会社だということに驚いた。また、スキークロスのピョンチャンオリンピックの代表になった選手を、子どもの頃に自宅に住まわせてまで育成した指導者の話も興味深かった。日本のスポーツは、世界と戦えるようなレベルの選手は国などからさまざまな支援を受けられるが、そのレベルに育つまでは地方の企業や個人が一生懸命無償で育てていて、その人たちの熱意で支えられているのだと感じた。また、「聖火のキセキ」というタイトルだが、「キセキ」が片仮名になっていることが少し大げさな気がした。ミラクルを伝えているのではなく聖火にまつわる人と人との関わりがテーマなので、奇をてらわないタイトルの方が内容を勘違いする人もなく、中身がもっと伝わったと思う。

○　１月１１日(金)北海道クローズアップ「初対談　北島三郎×大泉洋」を見た。番組の冒頭はカメラマンと大泉洋さんの掛け合いで始まったが、他局の旅番組を意識し過ぎたのではないかと感じ、この掛け合いが必要だったのかどうか少し疑問を感じた。二人の対談からは北海道に対するとても深い愛情を感じた。道民以外の人にも郷土愛を感じてもらえる内容に仕上がっていたと思うので全国の視聴者に見てもらいたい。

○　大泉さんが北島さんからとても上手く言葉を引き出しており、北島さんの経験や考えがよく語られていて面白い番組だった。有名人同士の対談というのはそう簡単には

設定できないと思うが、北海道のことを大切にしながら活躍しているさまざまな分野の人の対談番組の制作を希望する。

○　スター二人の会話の内容が化学反応を起こしていて、とても楽しい内容だった。北島さんのこれまでの経歴や実績が、知らないことも含めてはっきりわかった。美空ひばりさんに対する北島さんの思いも対談の中で語られていたが、とても感銘を受けた。私が高校生のとき「風雪ながれ旅」の舞台で雪を降らせ過ぎたことが話題になったが、番組でその映像を使用していてセンスがよいと思った。

○　番組の最後で北島さんが言った「北海道は背もたれ」というコメントはすばらしい例えだ。背もたれが付いているいすを触りながら語っていたが、ずっと心に残る表現だ。故郷を「背もたれ」と例えるのは、これまで聞いたことがなく、感銘を受けた。

○　番組の冒頭から大泉さんらしいキャラクターが出ていて、楽しく見ることができた。対談の中で一番感銘を受けたのは、北島さんが北海道を出るときに「ふるさとを捨てて東京に行った」と話していたことだ。逆に大泉さんは「北海道で仕事をしながら、東京でも仕事をしている」ということを話しており、二人の間に考え方の差はあるが、それでも北海道にしっかり根を持っていることが二人を結びつけていると感じられ感動した。また、二人が北海道の魅力を語るシーンでは、北海道が本当に好きなのだという思いがしっかり伝わってきた。また、二人がプロとしての思いを語っていたが、北島さんは今でも素人が自分の歌を歌うとき、いいところがあれば盗んでしまうと話しており、固定観念を持たないすばらしさを感じた。

○　すごく面白い番組だった。大泉さんの進行は抜群で、他の人との対談もぜひ見たいと思った。北島さんの昔話を温かく聞いていた大泉さんの様子にほのぼのとした感じになった。有名なお二人を身近に感じることができた番組だった。

○　北島さん、大泉さんそれぞれの個性がよく出ていた。北島さん自身が番組の中で何度も「ふだんはこんなにしゃべらないけど」と言っていたが、それくらい大泉さんが北島さんの話をうまく引き出していた。番組冒頭の演出はいかにも大泉さんらしい感じがしてよかったと思う。番組の中で流れていた北島さんの昔の映像を見ると今の歌手には無い声量の大きさを改めて感じたし、番組全体を通して、今の北島さんの魅力も感じることができた。

（ＮＨＫ側）

対談番組ということで視聴者に硬い印象を与えてしまう可能性があり、ま

た若い人にも見てもらいたいと考えていたため、番組冒頭でカメラマンと大泉さんの掛け合いを取り入れた。

○　１２月３１日(月)の「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。事前情報もなく久しぶりに見たが、以前のような対決スタイルからかなり脱皮し、ショーとして完全に成立しており、改めてＮＨＫの底力を目の当たりにした。米津玄師さんの存在感に驚き、すごい歌手が出てきたと思った。

○　あまり期待せずに見ていたが、近年にない「神回」だったと思う。総合司会の内村光良さんの司会ぶり、ＮＨＫや他局のキャラクターでも登場するなど、彼のおかげで「紅白」はかなりよくなっている。一方で、直前のＰＲ番組については内容に乏しく考え直した方がよい。

○　１月８日(火)の「北海道ライブ！大泉洋が贈る応援ソングばかりのスーパーステージ」(総合 後 7:30～8:15)を見た。もともと盛りだくさんの内容だった北海道で放送したものを全国版に編集していたが、番組のコアの部分や全体の流れを変えずにブラッシュアップされていて、見やすくなっていた。複数曲歌った歌手の歌を一部カットしてダイジェストにするのは歌番組としては大胆だったが、北海道の復興がテーマの番組なので、この形が正解なのだと思う。温かく前向きなエネルギーに満ちた、いい番組だった。

○　全国で放送するにあたり、どのように編集するのかと思っていたが、歌をどんどんカットする一方、出演者と被災地の人々との繋がりが強調されており、全国放送の形としてよかったと思う。

○　１２月１６日(日)のＢＳ１スペシャル「再出発の町　少年と町の人たちの８か月」（ＢＳ１ 前0:00～0:49）を見た。これは「北海道クローズアップ」で取り上げたものに追加で取材した内容を加えたものだが、継続的に取材しているからこその新たなエピソードが加わっていて、更生の難しさや、更生施設で生活する少年たちと町の人々との関わりなど、いろいろな意味で深く考えさせられる番組になっていた。

○　１２月２６日(水)の「米子が生んだ心の経済学者～宇沢弘文が遺（のこ）したもの～」（ＢＳ１ 後 9:00～9:43）を見た。人々が豊かに暮らすにはどうしたらいいかということを考え続けた学者と、亡くなった学者の思いを受け継ぐ出身地の人たちが紹介されていた。社会における格差が大きくなった平成最後の暮れにふさわしい内容だと思って見ていたが、この番組を制作したのは鳥取県米子市のケーブルテレビ局だと

いうことに驚いた。普通なら米子市のケーブルテレビ局の番組を見る機会などほとんど無いため、とてもいい番組を見させてもらったと思っている。ケーブルテレビ局側も、いい番組を制作したらＮＨＫが全国に放送してくれる可能性があるというのは刺激になると思う。今後もこうした取り組みを続けてほしい。

○　１月２日(水)特集オーディオドラマ「サウンドミュージカル　雪色オルゴール」（ＦＭ 前0:00～1:00）を「らじる★らじる」で聴いた。室蘭は、石炭と港と鉄道の歴史を観光資源にしようという取り組みをしている中なので、石炭鉱石の妖精が話をつづっていくという内容はタイムリーで面白かった。映像が出てくるのも分かりやすくてよいが、ラジオドラマは自分の頭の中でどのようにでもイメージを構築することができるので、改めていいものだなと思った。最近はラジオをあまり聴いていなかったが、この番組をきっかけに改めてラジオを聴いていきたいと思った。

○　「ＮＨＫニュース７」についてだが、最近は柔らかいネタを取り扱うことが多く、バラエティーのように感じてしまうことがある。もっと厳しく切り込むようなニュースをお願いしたい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１８年１２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日（水）、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、若泉札幌局長と高木帯広局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「いまこそ、ひとつに　北海道ライブ」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、１月の番組編成について高木放送部長から、放送番組モニター報告について中田副局長から、視聴者意向について竹本広報・事業部長から、それぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	桐生　宇優	（北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜「いまこそ、ひとつに　北海道ライブ」（総合　１２月１４日（金）後 7:30～8:42）＞

○　番組の紹介を見たときは、普通のコンサート番組かと思ったが、被災地とミュージシャンとのかかわりも描かれていて、意義のある番組になっていた。また、歌と被災地の様子を映し出したＶＴＲのバランスが非常によく、大泉洋さんの司会も楽しく会場を盛り上げていて、最後まで飽きずに見ることができた。細川たかしさんは大御所の華があり、大黒摩季さんの北海道への強い思いやフットワークの軽さに感動した。ＳＨＩＳＨＡＭＯとむかわ町のししゃも屋との意外な接点、そこから実現した鵡川中学・高校吹奏楽部との共演も面白かった。Ｌｉｔｔｌｅ　Ｇｌｅｅ　Ｍｏｎｓｔｅｒと一緒に歌った真栄中学合唱部も、少人数であるのに強豪校であるということにまず驚き、歌っているときの笑顔に見ているこちらまで嬉しくなった。番組全体に前向きなエネルギーが満ちていて、元気をもらえる内容に仕上がっていた。

○　番組のタイトルからは、被災地への応援をテーマに収録された一般的なコンサート番組だと想像していた。しかし、番組が始まり、司会の大泉洋さんが登場すると会場の熱気が一気に高まる様子が伝わり、細川たかしさんと一緒に大泉洋さんが客席をバックに歌うシーンでは、会場と一体となる様子が感じられ、番組に引き込まれた。演歌に興味が無い世代でも、このシーンを見て、さらに番組に興味を持つことができたと思う。また、会場でパフォーマンスを披露したアーティストだけではなく、会場に来ていない北海道出身のアーティストたちによる被災地を応援するコメントや北海道への思いがあふれるビデオ映像も紹介され、番組を見ていて勇気づけられた視聴者も多かったのではないかと思う。また、ライブに出演したアーティストが、地震による被害が大きかった地域の中学生・高校生と交流し、ともに練習を重ねてライブに参加する企画もあり、そのアーティストを今後応援したい気持ちになった。さまざまな世代が楽しめて、被災地を応援する気持ちを新たにすることができる番組になっていた。司会の星麻琴アナウンサーの起用もとてもよかった。大泉洋さんの動きや発言にも上手に対応していて、最後まで安心して見ることができた。

○　番組の冒頭を見た際には、普通のコンサート番組ではないかという感じがしたが、番組が進むにつれ、出演したアーティストと北海道とのつながりがよく分かった。番組中に北島三郎さんと大泉洋さんの対談があり、限られた時間の中でも、北島三郎さんの北海道や地震の被害に遭われた方々への思いが伝わり、非常に感動した。一方で、ＡＫＢ４８のメンバーが歌った際に、舞台の背景に被災地で頑張る人々の写真を映していたが、それをもっと前に出す演出にした方が、見ている人に被災地の状況をはっきり伝えられたと思う。番組最後の大泉洋さんの「災害があったけれども、歌の力で心一つになれる。来年はみんな一緒に頑張っていこう」という締めくくりのことばは印象的だった。ただし、全体的にエピソードやテーマを詰め込みすぎたのではないかという感じもした。

（ＮＨＫ側）

もともとは北海道 150 年記念の企画であったが、北海道胆振東部地震の発生を受け、被災地を応援するコンサートへと企画を変更した。アーティストの思いがとてもこもっており、その思いに共鳴して、会場全体が一体になったと思っている。２時間収録したものを７３分尺に短くすることに苦労した。思いや熱気を伝えようとするあまり、少しエピソードやテーマを詰め込み過ぎてしまった面はあるかもしれない。

○　一般的なコンサート番組かと思っていたが、出演したアーティストが被災地を訪ね、被災地の人々とかかわることで何かを感じてもらう、という演出がとてもよかった。

その様子を見てからそれぞれの歌を聴くことで、歌に被災地への思いがさらにこもっているように聴こえた。ＡＫＢ４８のメンバーが現地の子どもたちと話す様子を見て、そしてその後に被災地の明るい表情の人たちの写真を背景に歌っているのを聴くことで、何度も耳にしていた曲が、被災地のために作られたような曲に聞こえてきた。また、大黒摩季さんがむかわ町の寺に集まった人々の思いや悩みを聞いているなかで、歌を歌い、周囲の涙を誘っていた姿に心が打たれた。その被災者の方々との会話で、「子どもが１人でトイレに行けない」「お酒を飲まないと眠れない」という話が出ていた。私たちは、壊れた建物や土壌をどうするか、次の地震にどう備えるか、ブラックアウトをどう防ぐか、という点に関心が移っていたが、多くの被災者がまだ地震の恐怖の中で生きているということを改めて思い知らされた。

○　被災者に寄り添い応援すること、地震によって観光業などが打撃を受けたが「北海道は元気だぞ」という点をアピールすること、このコンサートではその２つのテーマを両方取り入れたために、テーマがわかりづらくなってしまったかもしれない。出演者が被災地に行き、たくさんの被災者と交流して応援する気持ちを伝えたことで、被災された方々も勇気づけられたと思う。一方で、田畑を失った人や友人を失った人が、この番組を素直な気持ちで見ることができたかどうかについては疑問を感じている。ただ、コンサート自体は、すばらしいステージだった。

○　ＡＫＢ４８の「３６５日の紙飛行機」は、被災地を応援するという今回のテーマと合っていた。舞台の背景に映しだされていた写真が多少見づらかったが、いい演出だった。ただ、「被災地、頑張れ」と「歌で北海道を応援する」というテーマで無理に締めようとし過ぎではないかと感じた。それぞれのアーティストが、被災地への訪問を通して、被災地とのつながりを効果的に演出していたのだから、感動を無理に演出し過ぎなくてもよかった。家族も一緒に番組を見ていたが、著名なアーティストからのメッセージ紹介で、北海道にゆかりのある有名人がたくさんいることがわかり、うれしくなった。毎年、「北海道紅白歌合戦」のような音楽番組の制作をお願いしたい。

○　一般的な歌番組なのかと思っていたが、老若男女を問わず見ていて楽しめる出演者で、私自身も楽しく番組を見ることができた。番組の構成もすばらしく、エンディングで大黒摩季さんと来場者が「ら・ら・ら」を歌っているシーンでは、会場の一体感を感じられた。ただ、被災地を含む全道各地から双方向での演出という仕掛けがあった方が、「広い北海道をひとつに」というテーマに沿ったものになったと思う。司会の大泉洋さんは人柄のよさが伝わり、よかった。

○　司会の大泉洋さんと北島三郎さんの対談は、それぞれの個性や北海道への思いが感

じられ、もっと見ていたいと思った。被災地の人々と出演者が交流するロケでは、ＳＨＩＳHAMOが以前から交流のあったむかわ町のししゃも屋さんと、自然なやり取りがなされており、両者の関係性やきずなが伝わってきた。大黒摩季さんとむかわ町のたい焼き屋さんが交流するシーンでは、現地の人を一生懸命励まそうとする大黒摩季さんの姿が微笑ましかった。被災地と出演アーティストとの交流という企画はすばらしいと思った。

○　幅広い年代のアーティストが出演しており、誰もが楽しめる内容になっていた。今でも大変な状況の中で生活をする被災地の方たちは、被災地を訪れたアーティストたちに勇気づけられたし、楽しかったのではないかと思う。「いまこそ、ひとつに　北海道」というタイトルにしては、地域が限定されていたと感じたが、副題の「心にともす 歌の光」ということは伝わってきた。

○　会場のすばらしい雰囲気や、出演者の皆さんや番組に参加している方々の北海道や被災地への思いが画面を通して伝わってきた。北海道にゆかりのあるアーティストの応援メッセージも紹介されていたが、全国で活躍している北海道ゆかりの有名人がいるのだということを知るだけでも、とてもうれしい気持ちになった。毎年同様の番組を作ることは難しいかもしれないが、視聴者を勇気づける番組制作を今後もお願いしたい。大黒摩季さんの被災地での話や行動は本当にすばらしく、勇気づけられた。被災された方々との交流を通じて「子どもが 1 人でトイレに行くことができない」といった被災者の率直な不安を引き出していて、被災地で苦労している人々のことを身近に感じることができた。また、北島三郎さんと大泉洋さんの対談は興味深く見ることができた。対談をもっと聞きたいと思っていたところ、2019 年１月に「北海道クローズアップ」で対談が放送されると知り、すばらしい展開のしかただと感じた。

○　司会の大泉洋さんは、不慣れな司会の仕事ではあったが、一生懸命で、各出演者の持ち味を引き出していてとても良かった。会場の盛り上がりも画面越しから伝わった。アーティストが被災地を訪ねるという演出は、被災地の人々にとってもプラスになったうえに、実際に現地を訪ねたアーティストも、さらに被災地への思いを強くして歌うことができたのではないか。そのおかげで、聴き応えのあるコンサートになったと思う。また、単なる歌番組ではなく、復興がどのように進んでいるか、あるいは進んでいない部分がどれぐらいあるかという点も伝わってくる番組だった。アーティストだけでなく、被災地の子どもたちも出演していて、とてもよかった。

（ＮＨＫ側）

被災者を応援することと、観光面で打撃を受けた北海道の元気をアピール

していくことの両方のバランスに留意しながら制作を進めていく。

＜放送番組一般について＞

○　１１月３０日（金）北海道クローズアップ「希望の大地～厚真町 夫婦ふたり 再起への道～」を見た。出演していた夫婦が魅力的で、この夫婦に密着したスタッフの視点はすばらしいと思う。夫婦への最初の取材は地震の４日後だったという話だが、地震後でまだ精神的に不安定な時期から３か月間で信頼関係を築いたスタッフの努力に頭が下がる。夫婦で築きあげた歴史と、２人が暮らしてきた土地の持つ歴史が、夫婦の生活を通して感じ取れる、奥深い内容になっていた。

○　人間っていいなと感じさせる素敵なドキュメンタリーだった。震災の影響で家がボロボロになり、一生懸命育てた米は収穫できずにダメになってしまうが、それでも「厚真は希望の土地だと思う」という夫婦の姿に感動した。地震発生から間もない時期に、取材者と取材相手との信頼関係がしっかりと構築できていて、いい画を引き出すことができていた。きちんと取材相手に向き合っていた番組だったからこそ、国の米の補償制度の問題点なども見えてきて考えさせられた。

○　出演していた夫婦なくしては成立しなかった番組だったと思う。ぜひ夫婦の今後も見続けたい。来年、再来年、稲を刈ることができる日が来るのかどうか、ハスカップが取れるのかどうか、そこまで追うことができれば、また違う感動が生まれるのかもしれないので、引き続き取材を進めてほしい。

○　番組ディレクターと夫婦の、家族のような温かい関係がしみじみと伝わってきた。ディレクターから夫婦への質問も、夫婦のことを理解しているからこそできる的確なものが多かった。国の米補償制度については、制度への批判的なことが前面に出過ぎてしまっていると感じたが、消費者が農業と農業の制度を理解するきっかけになればよいと思う。

○　１２月７日(金)北海道クローズアップ「躍進！コンサドーレ」を見た。北海道コンサドーレ札幌が強くなった理由を分かりやすく丁寧に解説していて、興味深く視聴できた。勢いに乗っている前向きなチームの雰囲気が伝わってきて、非常に引きつけられた。サッカーを知らない人でも見ていて納得できる内容である一方、サッカーに詳しい人には既知の内容も多かったのではないか。うまく回っているチームの秘けつは、ビジネスなどにも参考になる話だったと思う。ただ、スタジオでの選手や社長とアナウンサーのやり取りに、若干かみ合わない部分もあった。事前の打ち合わせはあると思うが、もう少し、進行を詰めておくべきだった。

（ＮＨＫ側）

スポーツをテーマにする際には、スポーツファンではない方々に何をどう伝えるのか、という点が一番難しいと感じている。今回は、ミハイロ・ペトロヴィッチ監督が選手たちとどのように接して、やる気を引き出し活躍させるかということに注目し、ビジネスマン、特に管理職の人たちに響くような「組織を運営し活性化するために何ができるのか」というメッセージを発信できればと思って番組を作った。今後も一般の人にどれだけ受け入れてもらえるかという点を考えながらも、スポーツファンの方々にも満足してもらえるような内容の番組を目指したい。

○　ＮＨＫから「スポーツファンではない人、特に会社の管理職の職責にあるようなビジネスマンにもどう届けるか」ということを意識して制作したとあったが、番組の狙いがよくわかり、見事だった。ペトロヴィッチ監督のことばの数々が心に刺さった。

○　組織を運営している立場から、ペトロヴィッチ監督の「選手をリスペクトする、選手の悩みに耳を傾ける、選手はファミリー」という話は大変勉強になった。また、ゲストとして出演していた選手の動きの解説から、サッカーの見方が改めてわかった。

○　１１月１７日(土)ブラタモリ「富良野・美瑛」を見た。タモリさんが淡々と進行しており、番組の内容が伝わってきやすく、地元の人間が知らないことも丁寧に無理なく伝えていた。富良野・美瑛は北海道で最後に開拓された土地だが、肥沃（ひよく）でさまざまな種類の野菜ができるという話や、上富良野の地層のサンプルを示してくれたり、当時の農機具を再現して見せてくれたり、話が分かりやすく、切り口がすばらしかった。北海道の各地で「ブラタモリ」のような番組ができれば良いと思う。

○　１２月９日(日)目撃！にっぽん「働いて人生を取り戻す～元ニートたちの挑戦～」を見た。元ニートの人を屋根職人として雇用して育てていくという会社の物語だったが、うまくいったところも、失敗しているところもうまく番組にしており、長い時間をかけて、よく取材して番組を作ったのだと感じた。

○　１２月１５日(土)ＥＴＶ特集「アイヌらしく 人間らしく～北海道１５０年 家族の肖像」を見た。アイヌを出自に持つ２人の若者の葛藤を、それぞれの家族と周囲のアイヌの人たちとのかかわりから重層的に伝えていた。アイヌを出自とする若い人たちが、どのように今の日本の社会を考えていて、どのように生きているのかを本人の言葉から知ることができ、引き込まれる内容につながっていた。また、実際にアイヌの先祖供養の儀式などを映像でとらえていて、アイヌの文化や宗教観が、伝承や史料を

基にして親子の間で継承されていく様子や、奪われた文化が取り戻されていく様子も描かれていて、とても印象深かった。７月２７日（金）北海道スペシャル　シリーズ北海道１５０年　第２集「アイヌモシリに生きる」から新たな場面が加わっていて、前回よくわからなかった点もはっきり伝わった。

○　差別がどんなふうにされたかということが伝わりづらかった。映し出しづらいこともたくさんあるのだと思うが、もっと具体的に「こういう差別があった」ということがわかればよかった。

（ＮＨＫ側）

全国放送するうえでは、アイヌの人たちが歩んだ150年間の歴史を、基本情報をほとんど知らない北海道以外に住む人々にどう伝えるかを意識し、相当丁寧に説明する必要があると考えた。差別の歴史について視聴者の納得がいくように伝えていくことは、アイヌに関する番組を制作していく限り、この先も常に考え続けなければいけない課題だと思っている。

○　１２月１５日(土)ＢＳ１スペシャル「北海道開拓～困難の果てに」を見た。７月１３日（金）北海道スペシャル　シリーズ北海道１５０年　第１集「開拓～困難の果てに～」を見たときと大きな印象の違いはなかったが、最後に北海道胆振東部地震を取り上げていたところが違う点だったと思う。番組の従来の内容と、最後の変更された部分がうまくつながり、全国放送で見る視聴者にとっては、被災地の人たちと土地の歴史、土地の結びつきを深く知る機会になったのではないかと思う。

○　「北海道スペシャル」と異なり、全国の視聴者にも見てもらうことができる機会であり、アイヌの話も入っているということも含めて、とてもよかった。全国的には、北海道といえば食べ物がおいしいとか、観光地というイメージばかりで語られるが、番組を通して北海道の生き方というのはこうなのだ、ということを発信できたのはよかった。ローカルで放送したものを改めて編集し直し、全国に放送してくれたことをとてもうれしく思う。

○　１２月１６日（日）西郷どん「敬天愛人」（総合 後 8:00～8:58）を見た。最終回を迎え、大久保利通が暗殺されるところで、西郷隆盛と大久保利通２人の過去の思い出が走馬灯のように流れるシーンがあり、大変興味深い演出だった。西南戦争と明治維新の関係については悲しい出来事だったと思うが、印象深い番組になっていた。

○　１２月１４日（金）「ほっとニュース北海道」のコーナー「シリーズ北海道１５０

年」を見た。150 年前、宗谷岬の防衛に当たっていた津軽藩の人々が病気になったとき、コーヒーを薬として飲んでいたという話だったが、北海道のコーヒーの消費量が多いのは、こうしたことに起源があるのだと思った。

○　１１月２４日（土)、2025 年の大阪万博が決まった翌朝のニュースでは、万博の招致に成功し、喜びに沸く大阪の様子ばかりが取り上げられていた。万博の開催については反対意見も多く、それらの意見もくみ取る報じ方をすべきだと感じた。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１８年１１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、若泉札幌局長と山田釧路局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道クローズアップ「“スマート農業”が北海道を変える！？」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、１２月の番組編成について高木放送部長から、放送番組モニター報告について中田副局長から、視聴者意向について竹本広報・事業部長から、それぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「“スマート農業”が北海道を変える！？」
（総合　１１月２日(金)）について＞

○　世界も注目する研究を北海道がやっていると驚きを感じながら見た。無人トラクターや実りの状況を細かく分析する技術など、もうここまで進歩しているのかと感心した。トランスボーダーファーミングのメリットとデメリット、さらには外国の事例も提示しながら将来を考える内容になっていた。ただ、単純な規模拡大や機械の共同利用と、トランスボーダーファーミングとの違いが少し分かりづらかった。

○　スタジオでドローンを飛ばして紹介するという冒頭の演出はインパクトがあり引き込まれた。農業の現場に行く機会があまりないので、ＩＴ技術を駆使した新しい農業のやり方を知るきっかけになった。最初に番組全体の流れを紹介していたのも非常にいい工夫だった。最終的にはスマート農業で人間を越えるところを目指していると

いうことだが、それがもう目前になっていると感じた。しかし、農業人口の減少などでスマート農業の導入は避けては通れない状況に来ていても、必ずしも皆が歓迎しているわけではなく、戸惑いの声もあるのだということが伝わり共感した。ドイツの事例まで紹介する中で、「スマート農業を導入しないほうがおかしい」という雰囲気を感じてしまったが、そこまで割り切ることができるかという気持ちも残った。スタジオで、農作業の現場だけではなくて消費者にもいい影響があるという話もあったが、そこをもっと知りたいと思った。

○　北海道の農業が、人口減少によって人工知能に頼るしかないほど厳しい状況に置かれていることが伝わった。人工知能と共に生きる社会がどのようになっていくかという例を具体的に知ることができ、ここまで進歩しているのかと感心した。しかし、機械を導入できる人とできない人の間で格差問題が生じるだろうと思った。また、人間のやりがいという本質的な問題も提起されており、土作りにこだわる人の意見には共感する部分も多くあった。ドイツのトランスボーダーファーミングの事例も理解の助けとなった。一方で失敗例なども紹介してもらえればよかった。最終的には、「スマート農業のゴール」がどこにあるのかを知りたいと思った。

○　農業に携わらない人にも分かりやすい内容になっていた。人手不足や経験不足などの問題もスマート農業化で補っていける状況になってきているので、研究開発して取り入れていくべき技術だと思う。番組では、推進派と慎重派双方の考え方が伝えられておりよかった。また、消費者としては、この先食べ物はどうなっていくのかという不安もあり、そこは違う側面の課題だと思っている。農業は北海道にとっては非常に大きなテーマであるので取材を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

トランスボーダーファーミングと、機械や農地の共同利用の違いについては、模型を使って分かりやすく説明したつもりだが、同じように聞こえてしまったかもしれない。トランスボーダーファーミングは、所有権を持ちながら機械を共同利用していこうという考えのことである。

○　横文字だらけの時代が来ていると考えさせられた。農業が自動化されることによって仕事がなくなる人が出てくるという問題もあると思う。農家の方々の意見交換会では、賛成・反対の意見が出ていたが、どちらが多数なのかは番組からは伝わってこなかった。また、番組ではドイツまで取材に行き、成功例を中心に紹介していたが、苦労した点や失敗例などの部分があまり見えてこなかった。北海道の人たちの自然農法

へこだわりという点も番組内に入れてもらえたら深みがでたのではないか。また、タイトルの「北海道を変える」という言い方は大胆すぎたのではないか。農業だけでなく、他の産業でも北海道をリードしているものはたくさんある。

○　農業人口の半減に危機感を抱いた。さらに高齢化も進むなかで、農業の効率化は好むと好まざるとにかかわらず、近々に進めていかなければ食卓に影響する問題なのだ、と焦りを感じた。そのような状況下では集団化もやむをえないとはいえ、自身のこだわりや土地への愛着ゆえに戸惑う人の意見を聞いて、もしも私が農家だったら、きっとトランスボーダーファーミングには反対するだろうと思った。だが、そこにドイツの例が出てきて、それはとても希望を感じさせる明るい情報だったので、ぱっと視界が開ける感じがあった。「北海道クローズアップ」では、海外の事例を紹介することが多いが、今回のケースはそのまま日本でも生かせそうな実践的な内容だったので、農家のかたにとっても大きなヒントになったのではないか。アメリカなど他の国の例も気になった。

○　全体的に非常に分かりやすい構成になっていた。ついに畑作の分野までスマート化の波がきたのかと実感した。日本とドイツの事例どちらに関しても、トランスボーダーファーミングのメリット・デメリットをきちんと説明していて、個人個人の生きがい、生き方にまで影響を及ぼす、というところもちゃんと説明されていたので、農家のかたが見ても農業従事者ではない私が見ても、理解できるところまで掘り下げていた。総じて未来を感じさせる番組に仕上がっていた。

○　確かに、ＡＩは農業のサポートになるが、「地元から農業者を減らさない」ということがこれからの農業のテーマの一つである。若手を育てようとすれば、人は人によってしか育たないと思うので、そういう点もぜひ番組で取り上げてほしい。

○　分かりやすくするがために正確性に欠ける説明もあったかと感じた。番組内では農家の平均年齢が６７歳と伝えていたが、私が調べた農林水産省発表のデータでは、北海道が５８歳で全国が６７歳だった。農業においては北海道と全国の状況は全く違うので、そこは重要なポイントであり、北海道の数字を出すべきだったと思う。また、オランダはスマート農業の先進国であるが、オランダからの視察者が番組内で何かの技術の一部について「すばらしい」と言っていたのかもしれないが、日本のスマート農業全般がすばらしいと絶賛しているように見えてしまう。トランスボーダーファーミングについては、それがイコール「スマート農業」という簡単な構図に見えてしまった。できればまずは現在導入されている一般的なＩＴ技術についての紹介をし、そこに未来の技術についても加えて紹介するという番組構成だったらふに落ちたと思

う。ただ、私は農業側の立場で番組を見たが、一般の人にとってはスマート農業というテーマ自体が新鮮なんだということを知るきっかけになったので、それはよかった。

○　番組冒頭に登場したドローンのインパクトに驚いた。これからの時代では、農業だけではなくあらゆる分野がＩＴやＡＩと結びついてくるだろうから、北海道の産業にどのように影響するのかはまたの機会に取り上げてほしい。トランスボーダーファーミングは、機械の値段が高いので何軒かで機械を使い回すという風に自分は理解したが、機械が安く手に入るようになったらこの仕組みはどうなるのかという疑問もわいた。また、スタジオの解説の中で、「ＰＤＣＡサイクル」という言葉が突然出てきて、糸井羊司アナウンサーがフォローをしていたが、一般の視聴者にとっては分かりやすかったかどうか気になった。

（ＮＨＫ側）

農業人口の平均年齢については2017年の全国の数字を紹介した。北海道向けの放送であるので、両方出すなどの配慮が必要だったかもしれない。また、オランダの視察団の人は、日本のドローンのシステムのことをすばらしいと言っていた。今後も誤解を招かないよう丁寧な番組作りを心がける。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１９日(金)放送の北海道クローズアップ「北海道は、へこたれない。～鈴井貴之 胆振東部を行く～」を見た。気持ちを切り替えて復興しようとしている姿が自然に伝わってくるような構成が非常によかった。番組内で紹介していた食事はどれもおいしそうで、視聴者もこうやって旅をして応援すれば良いのかと番組を見て思ったのではないか。糸井羊司アナウンサーのナレーションもあたたかく好感が持てた。案内人の鈴井貴之さんや、出演する人々みなが自然体で、意図的な演出感も感じず、番組から北海道の人たちの柔らかい性格が伝わり、ドラマを見ているような感動があった。道民より北海道外の人たちに見てほしい番組だと思った。

○　北海道クローズアップ「北海道は、へこたれない。」を見た。番組で取り上げていた、むかわ町のシシャモ店は、いろいろなところで取り上げられていたので新鮮みに欠けるのではないかと思った。ほかにも復興への動きがあるところ、まだまだ観光客が戻っていないところがあると思うので、そういうところにも目を向けて見つけてほしい。

○　北海道クローズアップ「北海道は、へこたれない。」を見た。北海道を元気にしようという思いが伝わるあたたかい放送だった。ただ、最後のほうにピンクの文字に白

い縁取りで出たテロップが見えにくかった。視聴者には高齢者も多いので、見やすさは大事だと思った。

（ＮＨＫ側）

北海道以外の人にも見てもらいたい気持ちは同じだったので、１１月１０日(土)に少し長い尺に再編集した特別版をＢＳプレミアムで全国放送した。こういった北海道の元気な姿を紹介するような種類の番組を全国に届ける努力をさらにしていきたい。

○　１０月２５日(木)の「ほっとニュース北海道」で池田町が取り上げられていた。池田高校の子どもたちがダンプレ（ダンスプレイ）を披露していたが、後ろのワイン城の明かりが暗かったので、やや寂しく見えてしまった。

○　１０月２６日(金)北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「水の宝は心も潤す～道東・水辺の旅～」を見た。旅人の戸次重幸さんは自然体で嫌みがない感じのよさがあり、番組のテイストに合っていた。「水の恵み」というテーマでくくっていることは分かるのだが、紹介していた場所がどこも何となく唐突な感じがして、全体的に散漫な印象を受けた。また、松浦武四郎とのつながりも薄く感じてしまった。戸次さんと子どもたちのやり取りには心が温まった。

○　北海道中ひざくりげ「水の宝は心も潤す」を見た。戸次さんと住民の距離感や雰囲気は、シリーズのなかで一番よかった。今後の「北海道中ひざくりげ」にもまた出演してほしいと思った。

○　１１月１６日(金)の北海道クローズアップ「液状化から地域を守れ～札幌　里塚地区からの報告～」を見た。液状化の影響が大きかった地区を中心に、その現状と課題を浮き彫りにした番組内容でタイトルとも非常に合致していた。建物の被害を建物内部からも伝えていて、深刻さも伝わった。また、ＣＧをうまく使っていて液状化のメカニズムを説明しいていたのもよかった。北海道のどこにでも起こり得るということが示されていて、身近に起こる災害だと分かった。復興には何が必要なのか、その大変さについても千葉市美浜区の事例を出して説明していたのがよかった。

○　北海道クローズアップ「液状化から地域を守れ」を見た。以前も番組で取り上げていた家族の続報を紹介していたのがよかったが、先が見えない状況はあまり変わらず、明るい話が出てこなかったので、見ていて辛い思いがした。今回は再発防止のための液状化対策工事の話が中心だったので、行政の補助がないままの家の状況がどうなっ

ているのかは番組内に出てこなかったので気になった。液状化のおそれがあるエリアのマップを見ると、札幌中心に全道各地に散らばっており、液状化は人ごとではないと思ったので、今後も長期的に追い続けてほしい。

○　北海道クローズアップ「液状化から地域を守れ」を見た。生活をどのようにして守っていけば良いのかというヒントをもらえる番組だった。千葉県の美浜地区の事例紹介を見て、非常に難しい問題だなと思った。糸井アナウンサーの「一人一人がわがこととして考えてみることがさまざまな災害対策に必要」という言葉に尽きると思った。地域と行政とが共に手を取り合ってコミュニティを守っていくことが重要だと感じる内容だった。

○　北海道クローズアップ「液状化から地域を守れ」を見た。番組としては分かりやすかったが、内容としては明るい話題はなく、液状化になったらどうにもならないのではという暗い気持ちになってしまった。今回、札幌の事例がすごく象徴的に取り上げられているが、ほかの地域でも液状化の被害があったということに触れてもよかった。

○　１１月１７日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ「定山渓鉄道誕生 100 年　大都市・札幌をつくった鉄道をたどる旅」(総合 前 10:25～11:08 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。番組を見たことによって、少しだけ知っていた定山渓鉄道についての知識が膨らんだ。昔の人にとって、定山渓温泉は圧倒的な存在感のある、特別な場所だということを再確認した。廃線後、働いていた人たちはどうなったのかというのが気になった。また、最盛期にはどのぐらいの人が使ったなど、データ的な情報があればなおよかった。石原良純さんの住民との話し方に好印象を抱いた。

○　北海道ＬＯＶＥテレビ「定山渓鉄道誕生 100 年」を見た。「ブラタモリ」のようなおもしろさもあり、まちづくりに鉄道がどう関わってきたのかよく分かった。番組の終わり方は少し物足りない感じがあった。久しぶりに藤岡みなみさんがナレーションをしていて、やはり上手だと改めて思った。

○　１０月２６日(金)のドキュメント７２時間「函館　ハンバーガーと幸せと」を見た。いろいろな人生があるということがかいま見えた番組だった。番組の最後の終わり方もとてもよかった。

○　ドキュメント７２時間「函館 ハンバーガーと幸せと」を見た。舞台になったハンバーガー店は函館にはたくさんの店舗があり、場所によっては観光客が多いところもあるが、その中でも、函館市民も「どの店舗だろうか」と思う場所を選んでいてよか

った。

○　１０月２８日(日)のＮＨＫスペシャル「知床 シャチ 謎の大集団を追え」を見た。ドローンや最新の機材などを活用しながら、知床・羅臼の自然の様子をきれいな映像で見せていて、見応えがあった。研究者がいろいろと仮説を立てて検証していくプロセスに　わくわくした。

○　ＮＨＫスペシャル「知床 シャチ」を見た。今まで何回かシャチの特集番組を見てきたが、回を重ねるごとにどんどんおもしろくなっている。迫力のある映像が多く、三宅民夫さんの語りもすばらしかった。制作には費用も多くかかると思うが、北海道から発信される自然番組としては非常に大きなものだと思うので、これからも続けて取材してほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「知床 シャチ」と、１１月１０日(土)放送の北海道ＬＯＶＥテレビ「超絶景を撮れ！ドローンＸ～北海道・道東編～」(総合 前10:25～11:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ともに、ドローンなどのさまざまな技術が融合したすばらしい番組だった。ドローンの活躍すべきところは、並行して走ることで疾走感が出せるというところにあると思うので、そうしたことも増えていくといい。ドローンの事故に気をつけて撮影を続けてほしい。また、ドローンを飛ばすときは許可を得ないといけないものなので、番組内でその断りがあった方が良いと思う。

（ＮＨＫ側）

ドローンについては最大限安全に配慮し、所定の手続きを踏んで撮影をしている。安全対策をとりつつ、新しい撮影手法にも取り組んでいきたい。

○　１１月１１日(日)目撃！にっぽん「再出発の町～少年と町の人たちの半年～」を見た。基本的に内容は北海道ブロックで放送したものと同じだったが、今回は影の部分を取り上げているのが一番の違いだと感じた。前回疑問に思っていた、就活の際に立ちはだかる制約なども取り上げられていて、困難さや、乗り越えなければいけないことも見えてくる作りになっていた。少年院出身の未成年をテレビに映すというのは難しい面もあると思うが、今後もぜひ追いかけていただきたい。

○　１１月１４日(水)放送の「あさイチ」ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩで元気な北海道を取り上げていただき、うれしく思う。登別クマ牧場の「どんぐり割引」は知らなかったので、ドングリを採って持っていくと割引してくれるというのは、すごくおもしろくて、かわいらしい取り組みだと思った。案内人の方が北海道出身なのに、クマ牧場に行った

ことがないと番組で言っていたのは少し残念だった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０１８年１０月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、若泉札幌局長から、９月１日付で新たに委員に就任した桐生宇優氏の紹介とあいさつがあった。続いて、若泉札幌局長と高木帯広局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道クローズアップ「日常を取り戻したい～北海道地震から１か月～」や、同日に放送した「ほっとニュース北海道スペシャル」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、１１月の番組編成について神村編成副部長から、放送番組モニター報告について中田副局長から、視聴者意向について竹本広報・事業部長から、それぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	桐生　宇優	（北雄ラッキー株式会社　代表取締役社長）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	蛭田　亜紗子	（小説家）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ　「日常を取り戻したい～北海道地震から１か月～」
「ほっとニュース北海道スペシャル」
（総合　１０月５日(金)）について＞

○　「北海道クローズアップ」では、地震から１か月のタイミングで、データで被害の全容に迫ろうとするよりも、被災者の気持ちや、亡くなった人たちの人生について伝えようとしていたのが印象に残った。

「ほっとニュース北海道」は、避難所からの中継や、他地域の地震の事例、停電の影響で救急搬送された人の話、ＳＮＳのデマ問題などを取り上げていて、震災から１か月でどのような問題が出ているのかを掘り下げて伝えていてよかった。

○　「北海道クローズアップ」では、清田区の液状化で被害を受けた家族や、厚真町で家族を亡くした被災者を取材していたが、遠慮して腰を引かずによくカメラを回し続けていたと思った。「そっとしておいてあげたらいいのに」といった批判もあるかもしれないが、被災者のつらさの実態に迫ることができており、それがきちんと伝わってきた。

「ほっとニュース北海道」は１時間半という長さだったが、見始めると充実していてあっという間だった。「北海道クローズアップ」とは対照的に、これから前を向こうという被災者の姿が印象的だった。熊本市と浦安市の液状化対策の取り組みが紹介されていたが、なぜ熊本市が全額を公的負担で対応できたのか、また、無償なのに反対者が多かった理由が気になった。

○　「北海道クローズアップ」では短い番組の中で４人にスポットを当て、丁寧に取材していた。悲惨なところにカメラを向けていた感じがあったが、そこに臨場感を感じた。被災者が口々に「夢であってほしい」と言っていたが、北海道でこのような大きな地震が起きて一瞬で日常が変化することを、だれも想像していなかったから出てきた言葉だと感じた。清田区では、基礎に亀裂が入っても「一部損壊」という調査結果で、補助も出ないと知ったが、「一部損壊」がいったい何世帯ぐらいあるのか、今後、札幌市はどういった対策を講じるのかが気になったので、この問題についてはさらに取材を続けてほしい。

「ほっとニュース北海道」では、ＳＮＳのデマについても取り上げていた。今回の地震ではよくも悪くもネットの情報が早く伝わったが、このような事態ではデマに惑わされないためのＮＨＫの呼びかけなどの対策が重要と感じた。地震から３か月、半年、１年後の放送というのがあれば、今回のことが風化することのないように伝え続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

被災者にどこまで踏み込んでいいのかは、常に取材する側の大きな課題だ。取材者には、常に「自分が取材される側だったらどこまで許されるのかを突き詰めて考えなさい」と指導している。行き過ぎないように意識しながら取材するが、厳しい状況を伝えて問題提起をすることもまたＮＨＫの使命である。液状化についても、数か月後、半年後に復興がどうなっていくのか追っていきたい。

熊本市や浦安市の液状化の対策の違いについては、どこにどのように補助金を出すのかという行政の「スタンスの違い」による。また、無料なのになぜ半数が反対するかというのは、コンセンサスを得るまでに数年かかるため、

被害の軽微な住宅は自分で修理してしまい、地盤をいじってまで抜本対策を講じることには無料でも賛成しないということが考えられる。清田区もこの後、同じようなことが想定されるので、引き続き取材を続ける。また、発災後には多くのデマが飛び交っていたが、そのような時に正しい情報を伝えるのがＮＨＫの役割である。

○　「北海道クローズアップ」では、一瞬にして大切な家族を奪われた被災者の心情がよく表されていた。こういう真摯（しんし）な姿勢こそ、公共放送であるＮＨＫが示すべきものだと思う。清田区で液状化の被害を受けた家族の家の中の被害がどの程度で、直すのにいくらくらいかかるのかの情報が番組内で少しでも出ているとよかった。

「ほっとニュース北海道」は、「北海道クローズアップ」とは別の視点で伝えており、厚真町の住民の中でも地域に住むのをやめる選択をする人と、居続ける人もいるという人間模様が伝わった。新しい設備ができることで北海道と本州の電源が強化されていくという明るい話題もあり、分かりやすい内容だった。

○　「北海道クローズアップ」では、センセーショナルな報道とは違い、被災者に誠実に寄り添っている感じが伝わってきた。厚真町民の開拓の歴史から来る絆の深さも紹介しており、ただの悲惨な被災地として以上に、この土地が受けた悲劇の重さというものを感じた。「前を向かなければ」という被災者の言葉で番組は終わったが、その言葉を聞いて、改めてタイトルの「日常を取り戻したい」という意味を考えさせられた。

「ほっとニュース北海道」では各放送局からの情報を集め、北海道全域を網羅していて、厚真町や清田区の現状といった重たいものから、むかわ町のししゃもや、安平町の和菓子屋の話など、硬軟織り交ぜて幅広く取り上げていたことに好印象を持った。一方で、話題が変わるテンポが速く、一つ前の話題を忘れてしまうということもあり、非常にもったいなかった。

二つの番組を、震災から１か月の節目で放送するという意図はよく分かるが、同じ日に見るには内容が盛りだくさん過ぎると感じた。特に液状化の先例としての熊本の例や、本州からの電力の供給の話や医療危機の話、そしてＳＮＳのデマの話は、掘り下げていくとそれだけでも３０分番組になりそうな深い内容だと思った。

○　「北海道クローズアップ」は、悲惨な現実の中ではあるが、上質なドキュメンタリー番組を見ているような番組作りだった。インタビューされる側というのは、カメラを向けられるだけでかなりの圧力を感じるものだと思うが、最後にこぼれた涙などは本当の涙だというのが画面からも伝わり、いい報道のあり方が見られてよかった。

「ほっとニュース北海道」も、丁寧に取材されていて分かりやすかった。これで終

わりではなく、これからも難しい問題がいろいろと起こってくると思うので、取材を続けて「災害のＮＨＫ」として頑張ってほしい。

○　共通して言えるのは、１か月というのは、まだ震災の記憶は頭の中に強く残りつつ、問題点や課題についても７～８割方見えて来るタイミングなので、今後の対策に関する考え方に大きな影響を与えると思う。こういうタイミングでの放送は民放やネットメディアにはできないＮＨＫの力であり、震災直後の報道以上に価値があると思う。

「北海道クローズアップ」を見て、厚真町では入植時から団結して開拓に努めたという話を聞き、厚真町の絆がなぜこんなに強いのかという理由が分かった。

「ほっとニュース北海道」は、多角的な視点から状況の報告があり見応えがあった。また番組後半に向けてだんだんと明るい方向に向かっていって、視聴者も応援したいという気持ちになっていくという流れになっており、いい役割を果たしたと思う。

○　同日に２本の放送はタイミング的によかった。

「北海道クローズアップ」は、地震の原因などの話ではなく、それぞれの人に焦点を当てており、家族写真や原野を開拓するときの古い写真を使っていたのがよかった。清田区で取材を受け入れてくれたご家族からは、信頼感を得たのだろうなという雰囲気も伝わってきた。ただし、画面上のテロップは「家族の思い、地域の絆」という言葉が出ていたが、本来のタイトルの「日常を取り戻したい」というほうが皆の思っていることではないかと思った。また、番組テーマソングの半崎美子さんの「明日を拓こう」という歌は、今回の番組の締めには特に合っていた。

「ほっとニュース北海道」は、前段で地域の課題を出し、後半は「新しい一歩を」という内容で、見た後に重く終わるのではなくて、これからよくなっていくのだろう、という気持ちにさせてくれる番組だった。

（ＮＨＫ側）

同じ日に９０分の「ほっとニュース北海道スペシャル」と「北海道クローズアップ」の編成は、重過ぎるという側面はあったかもしれないが、多くのかたが関心を持って見てくださる「明日は１か月」というタイミングを重視し、「ほっとニュース北海道」でも多くの話題を盛り込んだ。

○　「北海道クローズアップ」のタイトルに「北海道地震」ということばが使われていたが、本編では「北海道胆振東部地震」と言っており、正式な呼称はどうなっているか知りたい。

（ＮＨＫ側）

地震の呼称について、気象庁の正式名称は「北海道胆振東部地震」だが、全国の視聴者には「胆振東部」の場所が分かりにくいため、さまざまな協議を経て、全国に伝えるときには「北海道地震」、道内では「胆振東部地震」とした。

ただし、「北海道クローズアップ」のタイトルについては、文字数との兼ね合いもあり、「北海道地震」と表現させていただいた。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１２日(金)放送の北海道クローズアップ「僕たちの“ふるさと”～沼田町からの再出発～」を見た。複雑な家庭環境で育ち、非行に走ってしまった少年たちの現在を丁寧に伝えようとしている姿勢が印象に残った。なぜ沼田町にこうした施設が作られたのか、また、この土地に作るなら周りに就業させる仕組みがもっとないのだろうかということが疑問に残った。

○　犯罪を起こすまでに追い込まれてしまった子どもたちの置かれている厳しい状況がひしひしと伝わり、少年院にいた経験があるというだけで色眼鏡で見てはいけないということを伝える説得力を持った番組だった。また、彼らを支える沼田町の人たちの優しさが身にしみた。ナレーションも、子どもたちを一緒に支えたいという気持ちが伝わってくるような語りに聞こえ、とてもよかった。取材者との距離の取り方という点で気になったのは、先輩から「ピアスの穴を開けろ」と言われ、安全ピンで開けてしまった子を止めてあげられなかったのかということや、ハローワークで就職先を探してもらっている子が首にヘッドフォンをかけていたことなど、取材者が注意してあげることはできなかったのかということが気になった。また、テレビに顔を出していながら仮名にしている子もいたが、その意図も気になった。

○　心にズシンとくる番組だった。犯罪を犯してしまった子どもたちの復活への道のりを丁寧に取材していていた。沼田町の就業支援センターが全国でたった一つの施設であるということに、非常に驚いた。子どもたちを更生することにより農業の担い手にしていくという発想は、考えようによってはいやらしく見えるかもしれないが、「沼田町で僕は就職したい」と言うまでになった少年の顔を見ていると、子どもたちにとっては素晴らしいことなのではないかと思った。沼田町のすべての住民がこの施設を作ることに賛成ではなかったと思うが、エンディングで「きっとやり直すことができる、ただいまと言える町があれば」という言葉に感動し、自分の町もこれぐらい寛容であってほしいと思った。

○　女性のナレーションも柔らかい声質で、少年の成長を温かく見守る優しいまなざしが全編にわたって感じられた。番組内で取り上げた少年たちはどの子も強く印象に残り、施設出身の子どもを受け入れている花農家のかたも、農業に従事してくれる若者を「地域の宝として育てたい」「ゆくゆくは後継者にしていきたい」と語っていて、地域ぐるみで彼らを見守る様子に深く感銘を受けた。一方で、二十歳になった子がハローワークで仕事を探していたが、それだとあまり仕事は見つからないだろうと思い、その部分のフォローのシステムがまだ試行錯誤の途中なのかと、若干引っかかりを覚えた。

○　沼田町の優しさを感動的に見た。とても美しいきれいな話だが、それだけではないのではないのかとその裏側も知りたいと思った。

○　ナレーションの温かさが感じられて、素晴らしかった。沼田町民にとっても、この番組が放送されたことによって町民の理解がさらに深まるであろうことが、一番の収穫ではないか。全国にこういう施設がもっと増え、傷の深い子供たちが社会復帰できるように国の態勢を整えてほしいと思った。

○　施設の人のみならず、どの町にも、過去に犯罪を犯してしまった人や暗い過去を持っている人が住んでいるかと思うが、そのような人たちも、十分地域に溶け込んで、地域の力として育っていける可能性を教えてくれた番組だと思った。トマトが赤く実ったシーンも、将来を感じさせていてよかった。

（ＮＨＫ側）

沼田町では当初、刑務所を誘致しようとしていたが、少年院を出た子どもたちを集めて、農業などの教育実習をするところがないかと法務省が考え、それで作ったのが沼田町の施設で、そうした未成年の施設は初めてだ。施設の子どもたちが施設を出た後は、周りにどのような受け入れ態勢があり、少年たちがどうなるのかという点については、また全国でも放送する予定があるので、いただいた意見を参考にしたい。

○　９月２１日(金)の北海道クローズアップ「検証“ブラックアウト”」を見た。ブラックアウトがどういう状況で起こったのかよく分かる番組だった。停電によってさまざまなものが品薄になっている状況について、電気がないとシステムが管理できず、物流が滞るということが大枠で理解できた。また、糸井羊司アナウンサーの質問が、自分も知りたかった内容がほとんど含まれており、非常に分かりやすかった。停電が

冬だった場合の想定や、停電後に企業がどう対応しているかという数字もきちんと出していてよかった。冬は電気が足りるか分からないという話もあり、企業だけではなく個人でも備えなければならない警告にもなった。大規模停電が起きるかもしれないという議論が前からあったという話だが、その対応を先延ばしにしてきたであろう状況も番組から伝わった。

○　９月２８日(金)放送の北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「大地の恵みとともに生きる～十勝～」を見た。今年度は「松浦武四郎スペシャル」ということで、ゲストの大泉洋さんを迎えて松浦武四郎の紹介をし、彼の好物や石への並々ならぬ関心を説明していて、今までより深く番組の内容に松浦武四郎が組み込まれている印象を受けた。途中で南こうせつさんの「北の旅人」の曲が流れるとき、その土地のアイヌの人々の文化が映像で紹介されたこともよかった。松浦武四郎が再び注目されている理由の一つは、アイヌの人々への接し方だったと思うので、道内各地を巡るこの番組でも、アイヌの文化と松浦武四郎の関係に、旅人とともにもっとアプローチして欲しい。

○　放送前から「北海道中ひざくりげ」と大泉さんのキャラクターがどういう化学変化を起こすのか楽しみにしていた。実際に視聴してみると、思いのほか違和感がなく、大泉さんが番組と調和していたが、見方を変えると、あまり個性を引き出せていない印象もあった。番組全体としては、あっと言う間に番組が終わったように感じ、さすがに番組に引き込むタレントのパワーというものを感じた。上士幌町のアイヌの人々の植物の知恵に関する話は、ほぼテロップのみで短くて、やや中途半端に感じ、アイヌの人たちがどういった植物をどのように使っていたのか、具体例を一つでも紹介してもらえれば印象は変わったと思う。また、収録時には収穫前の小豆が青々としていたが、その後、地震や台風の影響を受けなかったのかも気になった。

○　大雨でどんどん天気がひどくなっていく様子を面白く演出できたのは、大泉さんだったからこそと感心するばかりの番組だった。松浦武四郎とＴＥＡＭ ＮＡＣＳと住民という組み合わせに、今までは違和感のようなものを感じていたが、今回はあまり感じず楽しめた。

○　大泉さんのキャラクターがとても強烈だったので、ほかのＴＥＡＭ ＮＡＣＳのメンバーの回はどのような作りになるのか期待している。

○　１０月６日(土)放送の「Wild Hokkaido！ 占冠」では、素晴らしい映像に仰天した。英語の勉強にもなるし、ずっと流しておきたいと思った。「占冠」はアイヌ語で「静

かな場所」ということだが、意外に知らない基礎情報が外国のかたにも分かるようにまとめられていたのが新鮮だと思った。

○　１０月６日(土)放送の「北海道ＬＯＶＥテレビ」(総合 前 10:29～11:27 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)では、パン旅。「甘い！新鮮！濃厚！十勝食べ尽くしっ！」と、ダーウィンが来た！生きもの新伝説・選「たくましきタンチョウ　新たな故郷を開拓中！」が放送されていたが、再放送ということが伝わりにくかった。

○　１０月１３日(土)放送のＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた どうすんのよ！？ニッポン 第３回　健康寿命」を見た。これからの日本社会の方向性を考えさせられる番組だった。ＮＨＫはＡＩ関連番組をいくつか放送しているが、この視点でずっと続けてほしい。

○　９月１６日(日)放送の小さな旅 山の歌 夏「北の富士 輝いて～北海道 羊蹄山～」の放送を見た。私は登山はしないタイプなので、おそらく生では一生見ることはない景色をテレビで楽しめて、山に登った気持ちにもなり、ありがたい番組だった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

平成３０年９月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議は、井田副委員長の司会により開会。議事に先立ち、空席となっている委員長の互選を行い、新しい委員長に丸藤競委員を選出した。

続いて、若泉札幌局長と浅川室蘭局長からあいさつがあり、議事に入った。

会議ではまず、「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」について小野木編成局長から説明があり、「平成３１年度の番組改定」についての意見を伺った。

続いて、北海道クローズアップ「緊急報告　震度７の衝撃」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	成田　正夫	（ながぬま農業協同組合　代表理事組合長）
	村田　博	（(株)村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３１年度の番組改定」について＞

○　「今後も３０代、４０代向けの番組を」とのことだが、かつて、自分で「ほかの人がＮＨＫのどのような番組を見ているのか」アンケートをしたことがあり、その際に多くのレスポンスがあった。インターネットがメインの人たちも、情報感度の高い人たちはＮＨＫをよく見ている印象があった。軽い内容のものだけではなくて、きちんと中身のあるものを分かりやすく、楽しく表現してくれるのがＮＨＫらしさだと思うので、これからもきちんとした中身の番組を作り続けてほしい。

また、「ダーウィンが来た！生きもの新伝説」と「プロフェッショナル　仕事の流儀」は、毎週録画をして見ている。また、「チコちゃんに叱られる！」は周囲でも非

常に評判がいいので見始めた。子どもたちと楽しく見られる数少ない番組の一つ。子どもが楽しくても私が飽きてしまうとか、私が楽しくても子どもが飽きてしまう番組が多い中で、幅広い世代が楽しんで見られる番組だ。

○　ＮＨＫスペシャル「人類誕生」や「大江戸」シリーズ、またＢＳ１の「コズミックフロント」などで番組中のＣＧが革新的に進歩している。実写とＣＧの区別がつかないほどに完成されている。その部分を意識しながら、さらにおもしろい番組を制作してほしい。

○　「チコちゃんに叱られる！」は、人にすぐにしゃべりたくなる番組だ。脳天を突かれて感動してしまう話が必ず一つは盛り込まれている。私が付き合いのある若者たちも、チコちゃんのスタンプをＳＮＳに上げる人もいるぐらいなので、かなりはやっているのだなと実感している。

○　「チコちゃんに叱られる！」をはじめ、ＮＨＫのすごさは、良いものも悪いものも正直にエンターテインメントにするという点だ。９月１７日(月)の「のぞき見ドキュメント　１００カメ」（総合　後 10:45～11:15）では、出版社に 100 個のカメラを置いて、ありのままの姿を伝えているので、夢中になって視聴してしまった。要望だが、ＮＨＫにカメラを 100 個つけて、まずはＮＨＫ自身がどうニュースやドラマを作っているのかを見ると、きっと親しみが増すと思うので、ぜひＮＨＫでの「１００カメ」を強く要望したい。

また、今回の北海道地震のような災害時にＮＨＫを見たり聞いたりするかどうかは、ふだんからＮＨＫがどれだけ地域に密着しているかに直結するだろう。今回は圧倒的に地元ＦＭ局のほうが情報量が多く、私の周りではみなその放送を聴いていた。ＮＨＫは北海道にこれだけの局があるので、地元から発信する機会が多くなればいい。

○　ＮＨＫはドラマ全般の質が高い。特にドラマ１０「透明なゆりかご」は衝撃を受ける内容ばかりだ。さまざまな時間帯でも再放送し、幅広い世代の人に見てもらいたい。若者に聞くと、「ＮＨＫのドラマはお堅い感じがする」と言われるが、そういったイメージを払拭できればと思う。

○　「透明なゆりかご」はすごく重たい題材を扱っているが、それをあのようなエンターテインメントにしていて感動した。また、性教育に関してさまざまな議論が出ている時期に、このような番組を作っているのも、すごく勇気があると思った。

＜北海道クローズアップ　「緊急報告　震度７の衝撃」
（総合　９月７日(金)）について＞

○　地震発生４０時間後にこの番組が放送されたが、制作にあたっては大変な苦労をされたと思う。厚真町での土砂崩れによる行方不明者の捜索活動がリアルタイムに行われている中で、被災者の不安に寄り添う形で状況を正確に伝えていた。今後も、行政やボランティア団体の地震への対応、北海道のエネルギービジョン、また市民の意識が今後どう変化していくかなど、多角的な視点で震災を検証する番組の制作を期待したい。

○　電気はいつ、どこでつくのかといったことでみんな混乱していた時期であり、電気の復旧の優先順位についての解説は非常にタイムリーな情報だった。また、厚真町では捜索活動が夜を徹して行われていることも中継から伝わり、広い北海道の中でも遠い場所の貴重な情報を知ることができた。

○　停電が続いておりリアルタイムで見ることができず、後日ＤＶＤで視聴した。番組の最後に糸井羊司アナウンサーが「周りの人を思いやる気持ちを行動にしてみませんか」と訴えていて大変心に響いた。とかく「自分が自分が」となってしまう中、「周りを配慮する気持ちを」ということばにはっとした。

○　本放送時にはまだ停電中で、再放送で見た。みな同じように被災したなか、地震発生後４０時間でこの番組が放送されたことに、取材の早さを実感した。インタビューを受けた被災者の人々も、大変な状況のなかよく取材に答えていると感じるとともに、被災地の大変な状況も伝わってくる内容だった。糸井羊司アナウンサーによる専門家への質問は、自分たちも疑問に思う内容だったが、あの段階では専門家でも分かることは限られていたようだった。全体的に被害の悲惨さは伝わったが、番組テーマの「いま、何が必要なのか」についてはエコノミークラス症候群の予防以外は伝わらなかったように思う。また、被災地域の近くに身内や友人がいる可能性もあるので、例えば液状化被害があった清田区では、何丁目あたりが液状化したかなどを具体的に伝えてほしかった。そのほか、苫小牧やむかわの道路状況も、友人のＳＮＳなどで初めて知った。ＮＨＫは、道内各地に放送局があるので、それぞれの局の近隣状況をきめ細かく伝えることができれば良かったと思う。

○　停電のため後日ＤＶＤで視聴した。生で見たら、どれだけ生々しかったのだろうかと思った。避難所で両親の安否をテレビで一生懸命確認しているところなどは、ものすごく切迫感があった。全容が全く分からず、事態が刻々と動く中で、地震発生後４

０時間で作り上げられた番組には迫真性があり、見ている人間には、またいつ来てもおかしくない、次に備えなければという訴える力があった。また、いま何に気をつけるべきかという注意喚起にも、山崩れが起きそうな危険な斜面の見分け方や、液状化の可能性がまだありえるなどと伝えており、切実感があった。停電に関しても、復旧に差があるのは病院などのライフラインが優先されるという説明があり、時宜にかなっていた。また、糸井アナウンサーの「周りを思いやる気持ちを行動に」ということばは、誰しもの心が弱くなっているときに、共感を呼び、みなを勇気づけることばだった。

○　情報が限られるなか、決死の覚悟で現地を取材しており、被災者の切実な思いも伝わった一方で、悲惨さだけが目に映る印象もあった。エコノミークラス症候群や停電の原因については、具体的な情報が伝えられていて良かった。現地に行くまでの交通事情はどうだったのか、前日の台風で被害があった地域はどうだったのかが気になったし、地震が冬に起きたら、津波があったら、などを検証する番組も見せてほしい。

（ＮＨＫ側）

状況が常に動いている中、「いま何を伝えるべきか」を第一に考えた。次から次へと出てくる情報を、そこでどうせき止めるのかというのが役割だったと思う。周囲の状況がどうなのかという目線は常に大事で、現場で取材しているディレクターたちに、プロデューサーがふかんした目線をもって指揮をとることが重要だと感じている。また、災害現場ではどうしても悲惨さが目につくが、被災者を安心させたり勇気づけたりという大きな役割もあるので、ことさら悲惨さを強調する作りではない伝え方をこれからも意識したい。そして、今後も多角的な検証番組を制作し続けていく。北海道で必要な電気の半分が１か所で作られているという現実の検証や、液状化現象についてもその原因や対策について、また１か月の節目には、被災地の復旧状況や被災者がいま何に苦悩しているかを伝え、どのように支援していくかをテーマにしたい。さらに長期的には、厳冬期に災害が起きた場合どのように備えるかということについても、過去に起きた厳冬期の災害を教訓に考えていきたい。

○　まずは、このタイミングで番組を制作したことに感動した。「安心させる・勇気づける」という思いが細部からも伝わった。短い準備期間の中、完成度の高い番組だった。衝撃的な映像の多いニュースだけだと不安をあおられてしまうことがあるので、情報をまとめたこうした番組は、見ることで安心感が得られるので重要だと思う。

○　電気が復旧してリアルタイムで視聴できた。番組で糸井アナウンサーが出てきたと

きはほっとした。内容は、あの時点ではできる限りの最高点だったと思う。糸井アナウンサーの最後のことばは本当に良かったし、糸井アナウンサーと思われる人がラジオにも出ていて、個人の体験を踏まえながら注意点や心得を伝えていたのもよかった。また、避難者にインタビューを取りたいがために、避難所でメディアのスタッフが避難者を待ち伏せしていたというう わさがＳＮＳ上であったようだ。もちろん最前線の人は、節度を守りながら取材していると思うが、ＮＨＫとして被災地での取材で遵守していることがあれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

被災地での取材については、常に相手の気持ちを最大限尊重することに尽きると思う。現場にはそれを肝に銘じるよう伝えている。

被災地での取材では、取材者全員に「被災者の気持ちに寄り添い、迷惑にならないようにすること。むしろみなさんが必要とされているようなことを支援できる取材を念頭に置くこと」と周知した。今回、厚真町の避難所では、立ち入り禁止のところが多かったと聞いているので、もしかすると各メディアの取材者が大勢、避難所の外で待ち構えていたのではないかと想像する。それでも基本としては、本人の気持ちに最大限配慮して取材するようにしている。

＜放送番組一般について＞

○　７月２７日(金)に放送した、北海道スペシャル　シリーズ北海道１５０年　第２集「アイヌモシリに生きる」(総合 後 7:30～8:29 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。「北海道旧土人保護法」という法律が 1997 年に廃止になるまで、日本人は「和人」として、アイヌは「土人」と呼ばれ区別されてきたが、いままで「和人」はアイヌの人々に何をしてきたのかをもう一度知らしめ、重く突きつけてくれる番組だった。最初から最後まで１回で見切るには内容が重く感じたが、ＮＨＫにしかできない番組だとも思うので、今後ともこういう視点を大切に番組制作をしてほしい。

○　確かに重い内容だったが、最後まで興味を持って見ることができた。アイヌ文化のいい面にはいろいろなところで触れる機会があるが、負の面についてはあまり学ぶ機会もなく、「旧土人保護法」も番組で初めて知った。差別的な法律であることは伝わったが、何のためにその法律があったのかは、番組を通しては分からなかった。アイヌの過去がもう少し知れたのならば、より理解が深まったと思う。アイヌの人々から「これから自分たちの誇りと文化を取り戻そう」ということばもあり、失われたものを取り戻してほしいと思ったし、私自身ができることはないかとも思った。アイヌに

ついては違った形でも取り上げ、差別があったことすらよく分かっていない世代に事実を伝え続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

５９分間どのようにして視聴者の関心をつなぎ止めるかが一番難しいところだった。番組は第１集「開拓～困難の果てに～」とセットとなっている。北海道150年の歴史の裏には、アイヌの人々が極めて厳しい状況に置かれ続けた事実があることを、いま一度再確認してもらいたい思いで制作した。「旧土人保護法」については、もう少し丁寧に説明してもよかった。いただいた意見は参考にしたい。

○　８月２４日(金)放送の、北海道クローズアップ「故郷と祖国～加藤登紀子　サハリンへの旅～」を見た。最初は「なぜ加藤登紀子さんが？」と思ったが、最後には不覚にも涙がこぼれて止まらなかった。特に、在留邦人の松崎節子さんの「日本人の魂」ということばが何回も出てきたが、「やっぱり私は日本人だ」というラストシーンで、庭に日本とロシアの旗と桜の木があるという場面に感動した。一方で、コンサートの観客の中には、松崎さんのほかには在留邦人はいなかったのだろうか、なぜ松崎さんを訪問したのかは疑問として残った。日本に帰れなかった松崎さんの「子どもがいたので引き揚げ船に乗ることができず、子どもが憎かった」という壮絶な発言もあり、日本に帰れた加藤さんとの間に重い雰囲気が漂っていたようにも見えたが、それも含めて、ドキュメンタリーとして正直に伝えていたと思う。

○　冒頭で「歌が紡いだふたりの物語」というナレーションが入ったが、加藤さんのように日本へ帰れた人と松崎さんのように残らざるをえなかった人は同じ目線では語れないと思うし、終始２人の間のかみ合わなさ、すれ違いが気になり、「歌が紡いだ」という表現に引っかかりを感じた。しかし、最後に加藤さんが「彼女にとって日本人であることの切実さは、やはり受け止め切れなかった。それだけに胸に突き刺さった」と正直な感想を述べ、それでようやくふに落ちた。

（ＮＨＫ側）

壮絶な体験をした過去を持つ２人の女性が、「祖国」「日本人の魂」「国境」「故郷」について、それぞれ対照的な考えを持ち、それが交わらずにすれ違い続けるものの、２人の会話からはいろいろなことを感じることができるという構成にした。指摘のあった「なぜ松崎さんか」という点は、加藤さんが「いま最も悲しい思いをしている人に歌を届けたい」という強い思いを持っていることを、残留邦人を取材するディレクターが知り、加藤さんに何人かを紹介した

うち、一番交わりが深かったのが松崎さんだったからだ。そのことに番組内で触れられればよかったと思う。また、「紡いだ」ということばから想像される、最終的に２人が合致するイメージとは確かにその後にくる話が違うので、いただいた意見は参考にしたい。

○　８月３１日(金)放送の北海道クローズアップ「祭りが地域をつなぐ～芦別健夏山笠の３０年～」を見た。人口減少が続く道内の地方都市に住む自分にとって、興味ある題名だった。ただ、芦別での博多山笠３０年目を迎えるにあたり、継続の苦労や、地域を巻き込む方法を伝える番組だと思ったが、題名から受ける印象と中身が違い、少々残念に感じた。「流（ながれ)」というグループが主体となり、ボランティアなど山笠と関係ない活動で地域に評価されるのは当然のこと。地方を元気づけるためという善意の動きは、町のすべての人がもろ手を挙げて賛成してくれるわけではない。その中でも参加者の独りよがりにならないための苦労話などを、エピソードを交えて紹介してもらえれば、「芦別健夏山笠の３０年」という副題にふさわしい番組になったのではないか。

○　この祭りは、「ＮＨＫの番組を見て、見よう見まねで始まった」ということだが、それをここまで続けることができた理由も知りたかった。まちづくりにかかわる身としては、その秘密やコツがあれば、もっと興味を持って見られた。山笠が走るときの映像は、カメラも一緒に走っているのか、邪魔にならなかったのかと心配には思ったが、迫力のある映像でよかった。

（ＮＨＫ側）

高齢化や人口減少のまっただ中にある町が、山笠を通して地域の絆をどうつなぎ止めていくかをテーマに、地域の元気なところを紹介する目的で制作した。ご指摘を聞くと、３０年間の努力や葛藤がうまく伝わらなかったかもしれない。構成上、歴史的な背景をもう少し伝えていれば、伝わり方は違ったかもしれない。

○　９月１日(土)放送の「知っとく北海道　とことん！胆振エリア　伊達・苫小牧」(総合 前 10:30～11:20 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。あまり知られていないことをきちんと拾い上げており、とてもおもしろかった。苫小牧のホッキのプリンは意外だったし、カレーラーメン誕生秘話も奥深かった。伊達では、会員制農園が魅力的で、自分たちの農業の魅力を伝えたいという意気込みを感じた。さらに、街中にかっちゅうがあることも街の歴史を愛していることが伝わった。ゲストの篠原ともえさんも、話を楽しく膨らませており、会場の人とのやり取りがほほえましかった。ただ、番組のテンポが

いい反面、もう少し知りたい内容がさらっと進んでしまい、もったいないという気もした。

○　９月９日(日)放送のＮＨＫスペシャル「緊急報告　北海道激震」を見た。東京大学の古村孝志教授の解説がとても納得できた。似た土壌が全国各地にあるということなので、自分たちがどのような土地に住んでいるかを改めて確認しなければならないと思った。また、砂防・地すべり技術センターの池谷浩さんが「斜面の崩壊パターン」の話をしていたのも分かりやすかった。また、今回は苫東厚真火力発電所がダウンしたことで、ほかの発電所も引きずられてダウンしたということが分かりやすく説明されていて、これからは電気というライフラインのあり方も検証しなければならないと感じた。なお、報道は地震が中心だったが、地震前日の台風でも被害が出た地域もあった。一次産業には大きな被害があったということも伝えていただきたい。

○　ＮＨＫスペシャルは、北海道クローズアップからも２日後の放送だったので、今回の地震の全体像や専門的なことがより分かりやすくなっており、火山灰や地盤などの説明もあったのが非常に良かった。

（ＮＨＫ側）

地震、停電、台風による被害については、当初は被害が甚大だった地域が中心になっていたが、農業をはじめとする一次産業や、流通への全道的な影響などについても引き続き取材を続けていきたい。

○　報道では、スマートフォンの消費電力を節約する方法をはじめ、精神面でも技術面でもさまざまなことを繰り返し伝えてくれてよかった。ただ、９月７日(金)の「おはよう日本」内で危機管理アドバイザーという人が、停電時に冷蔵庫の食品をどうするか説明する際、冷蔵庫の扉を開けっ放しで説明しており、誤解を招く可能性があると思った。また、スマートフォンのライトの上にレジ袋を被せると明かりになると言うが、スマートフォンのバッテリーは貴重なので、ＬＥＤライトの上にペットボトルを置くなどのほうがいいのではと思った。また、南海トラフや首都直下型の地震で、何万、何十万という避難者が北海道に来た場合、受け入る余地があるかなどの議論は、今まで特集でもやっていなかったと思うので、そのような番組があればぜひ見たい。

○　停電でテレビが見られなかったので、ＮＨＫのラジオは大変役に立った。夜中に眠れずにラジオを聞いていたら、「被災地で眠れない人も、２週間でだんだん落ち着いて眠れるようになるものなので、それまでお気を安らかにお過ごしください」と言っていて安心した。　また、停電でスマートフォンのバッテリーがなくなっていくなか、

「機内モードで節電できる」という情報があり、まさに私の探していた情報だった。ＮＨＫが蓄積している、災害時に役立つ情報の豊富さを実感した。

（ＮＨＫ側）

今回の北海道地震のラジオ放送に関しても、初動から深夜帯まで、特設枠を設けながら放送を続けた。西日本豪雨や熊本地震を契機に、ラジオ放送のあり方も若干シフトチェンジしている。情報を正確に伝えると同時に、「呼びかける」ことを意識している。呼びかけることで行動を起こしてもらうとか、ちょっとした知恵をお伝えして安心してもらうということがねらいだ。眠れない夜のお供にこれからも活用していただければありがたい。

○　地震の観光への被害が甚大だ。宿泊業への影響も非常に大きいという報道がされているが、大きな北海道を小さく見ている人が多く、衝撃的な映像を見て「北海道は全部だめだ」と思われてしまうのは、非常に残念。ぜひお願いしたいのは、北海道発の番組を全国で多く取り上げていただき、北海道が元気であることを積極的に発信していただきたい。

（ＮＨＫ側）

観光への影響が大きくなってきた段階から、復旧・復興の動きを手厚く取材し、全国放送も含めて、元気な北海道の姿を多く伝えるようにしている。できるだけ早く元の状態に戻れるよう、ＮＨＫとしても支援していきたい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

平成３０年７月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

７月１日付で新たに委員に就任した成田正夫氏の紹介とあいさつがあった。続いて、若泉札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

会議ではまず、北海道スペシャル　シリーズ北海道１５０年　第１集「開拓～困難の果てに～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

続いて、８月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	井田芙美子	((株)いただきますカンパニー　代表取締役)
委　　員	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有) 良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役)
	成田　正夫	(ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	蛭田亜紗子	(小説家)
	丸藤　競	(函館市地域交流まちづくりセンター　センター長)
	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)

（主な発言）

＜北海道スペシャル　シリーズ北海道１５０年
第１集「開拓～困難の果てに～」
(総合 7 月 13 日(金) 後 7:33～8:32)について＞

○　とても感動的な、すばらしい番組だった。戦後に東京の世田谷から入植してきた人がいることを初めて知った。開拓を実際に経験した人から話を聞いており、開拓は遠い昔の話ではなく、最近まで行われていたことなのだということがよくわかった。東京世田谷から江別世田谷に入植した渡邊美佐さんが「私どうしてあんな幸せだったんだろう」と言っており、あのことばを引き出せたのはすばらしいと思った。北海道に向かう列車で歌った歌を聞いて、当時どのような思いだったのかが伝わってきた。全体的に映像が美しく、また昔の話だけでなく、これからの北海道を切り開いていく人たちをさまざまな形で紹介していたのもよかった。森田美由紀アナウンサーの進行と糸井羊司アナウンサーのナレーションもよかった。それだけにいっ

そう冒頭の木を切るシーンが気になった。当時の写真や映像は白黒だったり、ぼやけたりしていたが、それでも心に強く迫ってくるものがあった。開拓を経験した山形トムさんの絵も何か感じるものがあった。わざわざあのようなシーンを新しく作るのではなく、別の導入を考えたほうがよかったと思う。若い世代は開拓の話を聞いても全く実感が湧かないと思うので、ぜひ見てほしいと思った。

○　白黒の画面の中に森田アナウンサーがカラーで出てきた冒頭は、とても引き込まれた。森田アナウンサーは声や話し方に安心感があり、番組にとても合っていた。番組の最初で、「開拓」と「アイヌ民族」という２つのテーマに分けて、それぞれ番組を放送すると伝えていたのがよかった。東京の世田谷から江別の世田谷に入植した人たちの話を初めて知った。伊達の話もわかりやすく、開拓移民４代目の人が持っていた絵図はとても興味深かった。あのようなものが現代まで受け継がれていることに感動した。ところどころドラマ仕立てになっていたが、昔の写真よりも当時の感情などがよく伝わってくるとともに、飽きずに見ることができてよかった。北海道史研究協議会副会長の関秀志さんの解説が合間に入ることで、それまでの話を整理することができた。解説がとてもわかりやすく、ことばが少しなまっているのも親しみが持てた。「むしろ」など、若い人たちが知らないようなものについて、イラストで補足していたのもよかった。屯田兵の話は、女性が多く農作業に従事していたことや、最初は米づくりを行っていなかったことに驚いた。全体的にとてもわかりやすかったので、子どもたちの教育にも活用してほしいと思った。150 年というと昔に感じるが、開拓に挑んだ人たちの志や思いは、現代にも通じるところがあり、とても勉強になった。最後の「北海道は、希望の大地であり続けます」ということばはとても感動的でよかった。

（ＮＨＫ側）

「開拓」とひと言で言っても幅広い内容が含まれているが、時系列に沿って全ての経緯がわかるようにするというのではなく話題をあえて絞り、開拓の困難と人々がどのように闘ったのかという物語を伝え、かつ時代の流れもわかることを目指した。冒頭のシーンは、この番組が開拓の歴史をなぞるのではなく、そこに生きた人たちの生きざまや心の動きを伝える番組であると示すため、あのような導入にした。また地権者の許可を頂き、安全管理を万全にして撮影した。世田谷の開拓については当事者が存命で生々しく語ってもらうことができたが、伊達の話は写真すら残っていなかったので、ドラマ仕立てにした。

○　「開拓」がテーマということで明治期の話だと思っていたが、戦後そして現代ま

での長い時間軸で北海道の開拓をとらえていてよかった。特に、戦後にも開拓があったという話は初めて知ったので、興味深かった。食べるのも精いっぱいという状況で、文集作りが人々の生きる糧となり、今でも大切な思い出になっていることに感動した。渡邊さんのインタビューがとても印象的だった。明治から現代にかけて、行き場を失った人々が再起をかける場としての北海道という姿が浮かび上がってくる構成になっていたのがよかった。ただ、それぞれのエピソードの間の解説シーンは集中力が途切れてしまう感じがしたので、なくてもよかったのではないかと思う。しかし、お米の食用以外の使い道は勉強になったのでよかった。

○　「開拓」というと、屯田兵のイメージがあったが、この番組を見てそれ以外の開拓についても学ぶことができた。旭川の屯田兵の話で、米作が許されていなかったということだが、気候的な理由のほかに政治的な背景があったのかどうかが気になった。依田勉三の話はとてもわかりやすく、「挑戦者たちの十勝」という副題もよかった。失敗続きの依田勉三だったが、彼と晩成社の人々の志が現在の十勝を作っていったのだと感じた。世田谷の開拓については、当時開拓を経験した人たちがまだ元気に語っていて驚いた。「われわれ人間が生きるためには『パン』と共に心の糧を必要としている」ということばがとても印象的で、当時だけでなく現代にも通じるものがあると思った。このことばによって、非常に訴求力のある番組になったと思う。

○　冒頭の伐採のシーンは、木を切って建物を作らなければならない過酷さを伝えたいのだという印象を受けた。開拓について今まで知らなかった事実がわかり、とても勉強になった。また、開拓者たちの取り組みがさまざまな形で現代につながっていると感じた。特に、依田勉三は失敗続きの人生だったかもしれないが、後世の人がその失敗から学び工夫をしたことで現在の十勝がある。さらに、ほかの開拓者たちは、領地や食料を求めてやむをえず来たという印象だったが、依田勉三は志を持ってみずから望んで来たところがすばらしいと思った。だからこそ、現代の子どもたちも依田勉三を誇りに思っているのだと思い感動した。

（ＮＨＫ側）

エピソード間の解説シーンは、ＶＴＲで紹介しきれなかった部分を補足するために挿入したが、確かに集中力が途切れてしまう部分があったかもしれない。視聴者をさらに引き込めるように演出を工夫していきたい。屯田兵が米作りを禁止されていたのは、米作りのための整備よりも、開拓して農地を作ることが優先されたことや、北海道の気候に米作が合わなかったことが要因だ。晩成社については、「開拓」というのは成功した人だけの物語ではな

く、失敗の積み重ねによって今があるということで、この話を取り上げることに決めた。

○　北海道の４つの地域にそれぞれ異なる地域から移住してきた人々が、どのような思いを抱え、どのように生きたのかを丁寧に伝えていた。また開拓の跡が地名など目に見える形で残っており、北海道の各地域がどのような成り立ちを持っているのかを歴史的な観点から知ることができてよかった。また、北海道の開拓の歴史には、近代日本の国家的な政策が非常に強く影響を及ぼしていたことも番組の随所で示されていた。ただ、依田勉三が北海道への開拓を志すまでのいきさつを紹介する部分は、少し単純化しすぎてしまったように感じた。第１集で「開拓」、第２集で「アイヌ民族」を取り上げるということで、どちらも見なければ全体の印象を語ることは難しいと思った。

○　歴史が苦手な人でも見やすい番組だった。この番組を見て、屯田兵については学校で学んだが、北海道全体の開拓史について学ぶ機会がなかったと気づかされた。５９分という短い時間の中で、とてもよくまとめられており、驚くような事実が多くあった。各地で土地柄が異なるのは、開拓の経緯なども関係しているのではないかと思った。さまざまな実際の映像や写真などから、当時の苦労がとてもよく伝わってきた。渡邊さんや山形さんが昔の近所の人の名前をよどみなく話すのを聞いて、困難な状況の中で本当に強い絆で結ばれていたのだと感じた。ほかの番組とリンクすると感じられる部分もあり、北海道命名 150 年目に際してＮＨＫが大切にしたいと思っていることが詰まっている番組だと思い、好感が持てた。森田アナウンサーは落ち着いた語り口で、この番組によく合っていた。解説シーンの演出については、改善の余地があると感じた。

（なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた）

○　オープニングは少し残念だった。さらにエコロジー的な観点から考えると不適切なのではないかと思った。開拓について、４つの物語それぞれで入植の理由や開拓の方法が異なっていたことに驚いた。北海道民でもあまり知らなかったのではないかと思う。「開拓」は想像をはるかに超える辛苦の上に成り立っていたのだということが伝わってきた。全体としてよくまとめられており、エンディングは北海道の未来に期待を持たせるものでよかった。森田アナウンサーは優しい語り口でとてもよかった。

＜放送番組一般について＞

○　６月１６日(土)に放送した、先人たちの底力　知恵泉（ちえいず）「冒険の旅に出たい！～松浦武四郎　人生をワクワクさせる極意～」（総合 前10:30～11:13 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は武四郎について詳しく知ることができる、おもしろい番組だった。

○　６月２９日(金）北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「ふるさとの街　宝探して～安田顕が行く室蘭～」を見た。訪れたのが安田さんの故郷ということで、いつもは見られないような素顔が見られてよかった。特に母校を訪れて校歌を歌う場面や、校舎が残ってほしいとつぶやく場面はとても感情がこもっていた。とても好感が持てる番組で、今後も楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

室蘭がふるさとということで、安田さんに出演をお願いした。今回は「松浦武四郎」の要素よりも、「旅人」を優先して構成した。このバランスについては、今後も回ごとに考えていきたい。

○　内容がよくまとまっていて、楽しく見た。安田さんの思い出話や現地の人たちの思いがとても印象に残った。武四郎と現在の室蘭の人たちの取り組みを結びつけて紹介しようという意図は伝わってきたが、あまりうまくいっていない印象を受けた。もう少し強い接点が必要だと思う。

○　昔と今のつながりが感じられる番組だった。安田さんが番組の最後で旅への感謝を述べていたが、心から出たことばだと感じた。安田さんは落ち着きとユーモアがあり好感を持って見た。バターせんべいを見たときの反応は、記憶がよみがえってきたのがよく伝わってきた。紹介されていた現地の人たちもとても魅力的だった。特にクルーズ船の船長の山田京香さんは、父の仕事に憧れて船長になったということで、すばらしい若者だと感心した。安田さんと地元の人たちがお互いを引き立てあっていてよかった。武四郎については、各地の名産を記したすごろくが興味深かった。武四郎が絵がとても上手だったことに驚いた。

（ＮＨＫ側）

「松浦武四郎」と番組をどのように結びつけるかについては、今後も考え続けていきたい。

○　６月３０日(土)に放送した、知っとく北海道「とことん！石狩エリア　石狩・千歳」（総合 前10:30～11:20 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。以前はゲストの紹介が適切に行われて

いなかったが、今回はとてもていねいに紹介されていてよかった。また、データ放送についても親切に説明していた。千歳には観光のイメージがなく、いままで訪れたことがあまりなかったが、この番組を見て新しい発見があり興味を持った。ただ、支笏湖のサイクリングの写真で、ヘルメットをかぶっていなかったのは残念だった。

○　６月３０日(土)に放送した、ザ・ディレクソン　ｉｎ　旭川「勇者チャンネル」(総合 前 11:20～11:46 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。冒頭のナレーションが少し仰々しく、熱意が空回りしている番組なのかと引いた気持ちで見始めた。実際に見てみると、最初の印象に反してとてもおもしろかった。企画を練っている段階から紹介したのがよかった。採用されなかった企画もとても興味深く、私が一番興味を持った企画も採用されたのとは別のものだった。単調になりそうな街を歩く場面も、司会の山里亮太さんと髙橋美鈴アナウンサーのコメントが入ることで、リズムがよくなっていて好印象だった。髙橋アナウンサーは声がとてもきれいで、ずっと聞いていたいと思った。メインだった商店街の祭りよりも、キャンプのほうが勇者たちのそれぞれの特技が生かされていて、企画の趣旨に合っている感じがした。

（ＮＨＫ側）

どの企画もとても魅力的だったが、厳正な審査の末に「勇者チャンネル」が選ばれた。全体的に温かい番組になったと思う。旭川には寒さなど悩ましいこともたくさんあるが、番組を通じて旭川の魅力的な部分を理解してもらえたならよかった。番組を制作して終わりではなく、今回の出会いを未来につなげていきたいと思う。

○　７月１５日(日)北海道クローズアップ「あの時から・・・犯罪被害者　遺族の闘い」(総合 前 8:00～8:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。犯罪被害者の知る権利は最近少しずつ話題になってきたと感じているが、その背景には今回取り上げられたような人々の身を切られるような思いや活動があったのだとわかり、問題の重大さがよく伝わってきた。また、犯罪被害者である木村邦弘さんが、加害者の情報開示を求める活動だけでなく、息子を殺した加害者である精神障害者の自立支援を考える活動も行っていて、広い視野を持ったすばらしい人だと思った。この人を取り上げることで、この問題について根本から考えることができたと思う。また、番組は木村さんの活動が国を動かす瞬間をとらえていて、長く取材し続けてきたからこその内容だと感じた。

○　番組をどういう経緯で制作することになったのかにとても興味を持った。２５分という短い番組だったが、深く取材されていた。加害者、被害者のどちらかに力を入れすぎることなく、社会の問題として淡々と伝えていたのがよかった。

○　精神障害者は社会から冷たい見方をされることが多いが、精神障害者に息子を殺された被害者である木村さんが加害者の処遇を真剣に考えているということを紹介できたのは、本当に意味のあることだと思う。精神障害者の自立支援施設で働いていた、息子の弘宣さんの仕事への思いについても丁寧に伝えていて、番組に厚みが出ていた。「北海道クローズアップ」は新しいことをいち早く伝えているイメージだったが、今回は長期間にわたる取材に基づく内容だったと感じた。糸井羊司アナウンサーのナレーションもいつもと異なる重い雰囲気で、番組内容に合っていた。

（ＮＨＫ側）

木村さんが被害者であるにもかかわらず、加害者となった精神障害者の処遇についても真剣に考えていることから制作に至った。法務省から、被害者や遺族が望む場合は加害者の氏名に加え現状も伝えるよう指示する新たな通達が出るタイミングを見計らって、放送時期を検討した。制作にあたっては、この番組を見た人が、精神障害者に対して差別的な感情を持つことがないように注意した。遺族の悲しみと精神障害を持った加害者側のバランスがとても難しいが、木村さんの取り組みを通じてこの問題の両面を伝えることを目指した。

○　７月１２日(木) ＮＨＫスペシャル「緊急検証　西日本豪雨　“異常気象新時代”命を守るために」(総合 後 10:00～10:45)を見た。今回の西日本豪雨では溺死の人が多かったということで、対策によっては助かった人もいたのではないかと思い、とても関心を持って見た。これまでの対策や考え方では対応できないという現実がよく伝わってきた。大変痛々しさを感じるインタビューもあったが、これが現実なのだと受け止めなければならないと感じた。日本は地域によって気候が大きく異なることもあり、どこかで災害が起きてもひと事だと思っている人が多いように思う。また、大規模な災害が起こると、被害の少なかった災害が取り上げられにくくなる。それぞれの地域で現状を伝え、警鐘を鳴らす必要があると思う。

（ＮＨＫ側）

今回の西日本豪雨の取材によって得られた教訓を基に、北海道でどのような対策が必要なのかを伝えていきたいと思う。

○　７月１２日(木) ネーミングバラエティー　日本人のおなまえっ！【命名１５０年！北海道のおなまえ】(総合 後 7:32～8:17)を見た。北海道の番組は観光をテーマにしたものが多いと感じていたが、北海道の名前の由来を取り上げていてよかった。それぞれの内容も興味深く、放送のタイミングも観光シーズンの前ということで、と

てもよかったと思う。

○　北海道の地名の由来については不思議に思うものが多かったので、興味深く見た。「男爵いも」や「ジンギスカン」など、何気なく使っていることばの由来も知ることができてよかった。笑えるだけでなく、考えさせられる部分もあり、全体的に好感の持てる番組だった。

○　６月２８日(木）に再放送された新日本風土記「函館」を見た。この番組は 2012 年に放送されており、一度は見たと思うが忘れてしまっているシーンもあり、このように再放送するのはよいことだと思った。

北海道南西沖地震から２５年ということで、ニュースの中でもたびたび取り上げられていてとてもよいと思う。災害はいつ起きるかわからないので、当時の話を多角的に伝える、このようなキャンペーンは重要だと思う。

（ＮＨＫ側）

千島海溝の巨大地震・津波の発生確率の上昇を受けて、全道的に地震や津波の対策を強化し注意喚起すべきだと思い、取り上げている。東日本大震災の教訓についても、北海道ではまだ生かし切れていない現状があると思うので、今後も継続して警鐘を鳴らしていきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

地震や津波の対策については、放送するだけではなく、人々に浸透させることが大事だと考えている。テレビでの放送だけでなく、インターネットなど、知ってもらうためにさまざまな展開を考えていく。

○　西日本豪雨について、被害の様子を 360 度カメラで撮影した映像をＮＨＫが公開しており、現地の状況がよく伝わってきた。

○　気象情報をよく見るのだが、週間予報など少し先の予報は変わることがよくあると思う。それはしかたのないことだが、天気図などをわかりやすく説明して、現在どのような状況で、どのようなことが予測されるのかということを示すとよいのではないかと思う。特に若い世代は天気図の見方などを知らないと思うので、ぜひ伝えてほしい。

（なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた）

○　知っとく北海道「とことん！石狩エリア　石狩・千歳」を見たが、地域の魅力を紹

介する「知っとく隊」の２人はとても元気があってよかった。しかし、男性の話し方が特徴的だったので、高齢者には不可解に映ったかもしれない

○　「ＮＨＫスペシャル」のシリーズ大江戸を見たが、今までにない視点の番組で、ＣＧも精巧で見応えがあった。大江戸の仕組みには現代にも生かせる部分もあり、東京オリンピックに向けて学ぶべきことがあると思った。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

平成３０年６月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日（水）、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、議事に先立ち、５月１日付で新たに委員に就任した佐々木良榮氏の紹介とあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道クローズアップ「“経済”で道は開くのか？～どうなる　北方領土～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

続いて、７月の番組編成、放送番組モニター報告と視聴者意向報告の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	小林米三郎	（(株)小林本店・小林酒造株式会社　代表取締役社長）
副委員長	井田芙美子	（(株)いただきますカンパニー　代表取締役）
委　　員	嘉指　博行	（北海道新聞社論説委員）
	齋藤　拓也	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	佐々木良榮	（デザイナー、（有）良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役）
	丸藤　競	（函館市地域交流まちづくりセンター　センター長）
	村木　秀雄	（いわみざわ農業協同組合　代表理事組合長）
	村田　博	（(株）村田商店　代表取締役）
	柳谷　君予	（NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
	山下　徹也	（(株)グローバル経営センター　代表取締役専務）

（主な発言）

＜北海道クローズアップ「“経済”で道は開くのか？～どうなる　北方領土～」
（総合 ６月１日(金)）について＞

○　番組で３つの問いを立てて進行していたのは、とてもわかりやすくてよかった。番組の最後で北海道大学の岩下明裕教授が、地元目線でできる小さなことを積み重ねることが新しい何かをもたらすきっかけになると言っていたが、どのようなことなら可能性があるのか、もっと詳しく知りたかった。明快な答えが見いだせない問題ではあるが、実効支配が進み、日本抜きで開発が進んでいる現状をわかりやすく伝えていた。ロシア人のスタッフを択捉島と色丹島に派遣した理由や、スタッフがどのような人なのかを伝えたほうがよかった。

○　放送のタイミングがすばらしかった。色丹島や択捉島の現在の映像を見て、開発がとても進んでいるのだと感じた。岩下教授が言っていたとおり、共同経済活動は領土問題の解決には役立たないかもしれないが、地元の人たちにとってどのくらい経済効果を生むのか、もっと掘り下げてほしいと思う。ロシア人スタッフを択捉島と色丹島に派遣していたが、なぜ日本人ではだめなのかを説明したほうがよかった。

○　これまでの経緯や現状、元島民の思いやこれからの動向をうまく整理して、わかりやすく伝えていた。北方領土の問題は、北海道と国内のそれ以外の地域では認知度が全く異なっているので、このような番組が全国放送され、少しでも多くの人の理解が深まればよいと思う。色丹島のカラフルな施設の映像にはとても驚いた。中国から持ち込まれた資材の話など、日本抜きで開発が進んでいることをまざまざと見せつけられ、共同経済活動が進められている背景がよく理解できた。また、景色が美しく一度訪れてみたいと思った。ヨーロッパからの観光客が択捉島に増えているということで、北海道にはアジア系の観光客が多いと思うので、択捉島の観光の取り組みについて調べると、北海道にヨーロッパからの観光客を増やすヒントがつかめるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

論点が多い問題のため、どのように絞り込むかということを第一に考えて制作した。最後の岩下教授の意見をもっと詳しく聞きたかったということだが、具体的な解決策を示すことはとても難しかった。ただ、この難しい外交交渉において、元島民の人たちが置き去りになることは避けなければならないということを伝えたかった。ロシア人スタッフを派遣した理由については、外務省の渡航自粛要請に従い、日本人がビザを取りパスポートを持って北方領土に行くことは、北方領土をロシアの土地だと認めることになるため控えている。そのため現地取材をするときには、日本国籍以外の人にお願いしている。そのようないきさつを知らない人もいると思うので、説明したほうが丁寧だったと思う。今回の取材でもっとも驚いたのは、北方領土で外国企業を招き入れて開発がここまで進んでいるということだった。そこは伝えなければならない大きな点だと考え、テーマの１つとして掲げた。ヨーロッパからの観光客がなぜ多いのかについては、ロシアがヨーロッパの旅行会社に積極的に働きかけているということ以外はよくわかっていない。

○　北方領土の現実を伝えるということは大切なことだと思う。北方領土のリゾート施設の映像はとても衝撃的で、時代の変化を感じた。一方で同じような映像が繰り返し使われており、映像は使い回すほど価値が下がると思うので、一つ一つの映像

を大切にしてほしい。

○　北方領土の問題はさまざまな視点があると思うが、２５分という短い時間の中で３つのポイントに絞って伝えたのはよかったと思う。北方領土問題について詳しい人もあまりよく知らない人もこの問題の現在の要点がよく理解できたと思う。今まであまり見たことのない北方領土のリゾートホテルや自然の映像が見られてよかった。中国やドイツ、アメリカの企業が進出してきているという話題は、北方領土の現状を伝えるうえでとても効果的だった。岩下教授の説明がとてもわかりやすく、説明資料もシンプルでよかった。根室の経済的損失が５兆円という話がよくわからなかったので、もう少し詳しく説明してほしかった。北方領土の問題は道内では大きな関心事だが、日本全国ではあまり問題意識を持っていない人が多いので、ぜひ全国放送してほしい。

○　色丹島が日本抜きであそこまで開発が進んでいることに、これからの北方領土問題の厳しさを感じた。元島民の「今まで７３年間、期待と落胆の繰り返し」ということばがとても印象に残った。

（ＮＨＫ側）

北海道と北海道以外の人の間には、北方領土問題に対する認識に大きな差があるので、この問題について全国にも発信していきたいと考えている。根室の経済的損失の内訳については、確かに気になる人もいたと思うので説明できればよかった。外交交渉において北方領土問題が難しい状況にあることを踏まえたうえで、今回の日ロ首脳会談に対する元島民の人たちの思いを伝えたかった。

○　最初に３つのテーマを立てて構成を示したのはとてもわかりやすかった。日本側とロシア側の双方の主張がとても明快に説明されていた。現地の映像は開発の状況が伝わってくる貴重な映像だと思った。岩下教授の解説がわかりやすく、地元の人や元島民の視点での活動が重要だという意見には共感が持てた。

○　複雑な問題を３つのテーマに分けて、端的にまとめていてよかった。スタジオでの説明があることで、自分の中で内容を整理することができた。北方領土の現状を印象的な映像を交えて公平に伝えていた。色丹島に中国人の労働者が次々と降りてくるシーンは衝撃的だった。日本に返還されるはずだった場所が、日本抜きで発展している様子を見せつけられた。今の日本の外交と政治力の弱さを感じ、少し不安な気持ちになった。この番組に向けて多くの取材が行われたと思うので、１つのテ

ーマを深く掘り下げた番組もぜひ見てみたいと思う。

○　放送のタイミングがすばらしかった。私は政治についてあまり詳しくないが、それでもわかりやすい構成になっていた。多くの人にとって北方領土問題が身近に感じられる番組だった。あるロシア企業を「地域経済を牛耳るこの会社」と説明していたが、「牛耳る」ということばは悪い印象を与えるので、その表現が適当なのか疑問に思った。岩下教授の説明はとてもわかりやすかった。ただ、共同経済活動も最終的には領土問題に行き着くと説明していたのに、番組の最後で地元目線でできる小さなことを積み重ねることが大事だと言っていて、一貫性に欠けると感じた。小さなことから始めても結局は領土問題に阻まれるのではないかと思い、納得できなかった。この番組を通して、北方領土問題に対して深く考え、自分の意見を持つことができたのはとてもよかった。

○　ロシア人スタッフが取材した現地の映像は本当に目を見張るものだった。北方領土に観光資源が豊富にあるとわかったことは大きな成果だと思う。平和条約締結後に日本への引き渡しが約束されている色丹島ですら、実効支配があれほど進んでいると示したことで、視聴者に警鐘を鳴らすことができたのではないだろうか。解説は現状をなぞるだけで新しいアプローチがなかったので、もの足りなさを感じた。かつてプーチン大統領は北方領土問題に対して「引き分け」を目指すべきだと主張していたが、番組を見て結果的にロシアが勝ったのだと感じた。「引き分け」の状況からどうして後退してしまったのか、そこについて掘り下げたらもっとおもしろかったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

「牛耳る」という表現について、まず択捉島の議会にそのロシア企業の人間が多く属しているという現状、またその企業のオーナーがロシアの上院議員で北方領土の利権をほぼ手中に収めていることから、この表現は妥当だと判断した。この番組を見て、視聴者に北方領土問題について考えてもらいたいと思っていたので、そのための最大限の材料を提供することに力を入れた。「引き分け」からどうしてこんなに状況が変化したのかという視点は確かに入っていたらよかったかもしれない。私たちは今回の首脳会談の結果を踏まえて番組を制作したが、１年半前の日ロ首脳会談のときの「北方領土が返還されるかもしれない」という状況からの変化を伝えることは重要だと思うので、今後の番組制作の参考にさせていただく。北方領土は北海道が抱える大きな問題だと思うので、引き続き取材していく。

＜放送番組一般について＞

○　５月２５日(金)の北海道クローズアップ「大地の詩人たち～十勝　児童詩誌サイロ～」を見た。教室で先生が「サイロ」を持って入る場面で、子どもたちが目を輝かせて楽しみにしているのを見て、どのような雑誌なのか興味が湧いた。詩を通して土地に文化が根づいていることを知ることができ、十勝の魅力を改めて感じた。コトリンゴさんのナレーションや歌も番組の雰囲気ととても合っていた。

○　父親と息子が詩について語り合い、つながっているということが普通にある地域の存在に感銘を受けた。昔「サイロ」に入選した田中佑典さんの子どものころの映像が残っており、息子の泰芽さんと似た雰囲気が感じられてよかった。よい詩がほかにも多くあったと思うので、さまざまな詩を知りたいと思った。コトリンゴさんのナレーションもとてもよかった。番組で取り上げられることは地域の人にとって大きな誇りになると思う。これからもこの取り組みを大切にしていってほしい。

（ＮＨＫ側）

十勝の開拓が進む中で文化の灯をともそうと有志の人たちが集まって始めた取り組みが今も続いていて、子どもたちが表現することに本当に喜びを感じている現場があることに驚いた。番組で紹介できなかったすばらしい詩がほかにもたくさんあったので、今後も取材を継続していこうと考えている。コトリンゴさんの声の質や、読みのトーンの優しさがこの番組に合うのではないかと思い、ナレーションをお願いした。

○　十勝の美しい風景を伝えており、すばらしい番組だった。開拓時代の映像や、佑典さんの昔と泰芽さんの今、過去と現在を対比できるようになっていたのがとてもよかった。「サイロ」に関わる人たちが本当に美しいことばを使うことに感動した。今後も取材を続けてほしい。

○　心地よい余韻がいつまでも残るすばらしい番組だった。十勝の雄大な風景とそこに生きる人たちの心の叫びが、美しい映像と相まって深い感動を与えていた。詩の内容に合わせたアニメーションや、優しく語るコトリンゴさんのナレーション、半﨑美子さんの歌が番組の雰囲気にとても合っていた。開拓時代の苦しい日々が子どもの目線で語られている詩は強く心に響いた。このような児童詩誌を企画し発行した企業に感銘を受けた。この取り組みの発起人として企業名まで紹介すべきだったのではないか

と思う。田中佑典さんの昔の映像が残っており、ＮＨＫの映像保存のすばらしさを改めて感じた。

（ＮＨＫ側）

「サイロ」を企画した企業の名前を出すかどうかは制作時も議論したが、今回はこの会社の立派さよりも、子どもたちの中に詩の文化が根づいていることや、そのことばの力強さを伝えたいという思いがあり、紹介しなかった。今後も必然性があるかどうかを考えて判断していきたい。

○　６月８日(金)の北海道クローズアップ「奨学金という名の“借金”」を見た。番組冒頭で、糸井羊司アナウンサーが自分自身も奨学金を借りていたことを話していて引き込まれた。また奨学金の問題に対して、番組の方向性を最初に明確に打ち出していたのもよかった。番組の構成も大きく２つに分かれていて、わかりやすかった。近年、若年層の雇用が不安定化し、貸与型奨学金が未来への投資ではなくリスクになっているという話が印象に残った。奨学金がなぜ借金の性格を強く持つようになったのかを丁寧に解説していた。番組後半で、奨学金の不安をなくすための教育現場の取り組みが紹介されていた。このような個人的な取り組みは重要だと思うが、社会構造の変化が問題の根底にあると考えると、抜本的な解決にはならないと思った。番組の中で、日本学生支援機構の給付型奨学金について紹介されていたが、制度そのものについてもう少し詳しく知りたかった。

○　番組の構成はわかりやすくてよかった。奨学金の問題は社会構造の変化などさまざまな要因があると思う。そのような社会において、自分の夢をかなえるために借金のリスクを負ってまで進学する必要があるのかを掘り下げてほしかった。また、金融的な知識を持たない学生１人に判断させる社会にも問題があると思う。どこの大学で何を学ぶかによって費用も大きく変わってくるが、そのことに学生だけでは気づかないのではないかと思うので、そのような側面についても伝えられればよかった。番組の終わり方がきれい過ぎて残念だった。大学進学したから幸せになれるという訳ではないと思うので、もう少し厳しさを感じる締めくくりでもよかったのではないかと思う。

○　厳しい現状がよく伝わってきた。奨学金を安易に借りている人が多いと感じていたので、警鐘を鳴らすことができてよかったと思う。ただ、奨学金の問題で悩む学生の人選が適切ではなかったように思った。例えば、1,200 万円借りることを決意して薬学部に入学した生活保護家庭の大学生が取り上げられていたが、私立大学の理系は普通のサラリーマン家庭でも進学させるのは経済的に難しいと思う。公立の大学に行くなど、かかる費用を減らすことを考えたのか疑問に思った。番組のエンディングで取

り上げられていた、札幌市内にある学習支援教室が興味深かったので、もっと詳しく知りたかった。

（ＮＨＫ側）

政府が「骨太の方針」を示すなど新たな動きがある中で、給付型奨学金について情報が足りなかったかもしれない。薬学部に入学した学生は確かに一般的な例ではなかったかもしれないが、本人の責任ではなく、生まれた環境によって1,200万円の奨学金という借金を強いられているという現実を伝えたかった。先鋭化した事例かもしれないが、ここにも伝えるべきことがあると思った。また、奨学金の負担を減らす進路指導に取り組む高校を紹介したが、具体的な金額を提示しながらあそこまで踏み込んだ進路指導を行っているところは全国的にもめずらしかったので取り上げた。私立高校であったため、宣伝にならないように注意した。終わり方については、家庭の事情で学びたくても学べない子どもたちの夢を諦めさせないための支援があってもいいのではないかという思いを伝えたかった。しかし、厳しい現実があることも確かなので、どちらの要素も示すことができればよかった。

○　冒頭で糸井アナウンサーも奨学金の利用者だったと伝えていて引き込まれた。全体の流れがきれい過ぎて、結論ありきで制作されたように感じられた。奨学金は優秀な人がもらえるものというイメージだったが、約２人に１人が奨学金を借りていることを知り、改めて大変な事態になっているのだと感じた。学生に負わせるのは残酷だと思う一方で、安易に借りすぎていることも問題なのではないかと思った。「どっかで貧乏を断ち切らないと。」ということばが印象に残っているが、高学歴が必ずしも高収入につながるわけではないという中で、学歴にこだわるという矛盾がどうして起こっているのか疑問に思った。若年層の雇用の不安定化は社会構造と密接な関係があると思うので、それについても取り上げられればよかった。

○　糸井アナウンサーの出局初日の写真を示して、奨学金を借りていたというエピソードを紹介したことは、番組の導入としてとてもよかった。高校生の意見をボードで紹介していたが、読みづらくて残念だった。最後の学習支援教室の取り組みはすばらしかったが、奨学金の話とどのようにつながっているのかがよくわからなかった。

○　奨学金を滞納している人が３３万人に上るという事実は衝撃的だった。給付型奨学金について、アンケートに答えた高校生のうち４１．６％が知らないということであれば、利用する条件など詳しい説明があったほうがよかった。同じ高校を取り上げているにもかかわらず、一方では優秀な生徒が経済的な理由で進学を諦めるのを受け入

れる様子を紹介し、もう一方で学費が安い大学を紹介することで進学を促進する取り組みを伝えていたことに違和感を覚えた。また、奨学金にもさまざまな種類があると思うので、その相違点についても知りたかった。視聴者からの意見のボードは読みやすかったが、高校生の意見のボードが読みづらかったので、このような差があるのはよくないのではないかと思った。また半﨑さんの歌がエンディングを盛り上げていた。

（ＮＨＫ側）

高校生の意見が見えづらかったという指摘はそのとおりだと思う。視聴者からの意見はメールでもらったが、高校生のアンケートについては直筆だったため、それを生かしたいという思いがあった。しかし、確かに読みやすさに差が出てしまったので、今後工夫していきたい。年齢を始めとして、どのような生い立ちの人がどのような意見を持っているのかがわかりやすいように意識して番組を制作した。

○　奨学金を利用している人が身近におり、興味深く番組を見た。現状をわかりやすく伝えており、昔と今の違いについても明快に説明していた。具体的な金額を提示する進路指導はとても意欲的な取り組みで、好感を持って見た。番組の結論も給付型奨学金を増やすべきといったような極論に走ることなく、冷静でよかったと思う。ただ、そもそも学費が高すぎるのではないかということや、大学に進学する必要性についても改めて考えるべきだと思った。

○　糸井アナウンサーのエピソードから番組が始まったことは思い入れの強さを感じさせてよかった。教育問題はとても複雑で、奨学金の問題の背景にもさまざまな要因がある。その中で今回取り上げるべきだったのは、優秀だが家庭環境によって進学できない子どもだったのではないかと思う。奨学金を借りて薬学部に進学した学生は大変だと思うが、家庭環境以外の要素について思い及んでしまい、論点がぶれてしまったように感じた。また、制度の説明も不十分だったと感じた。具体的な金額を提示する進路指導や、学内で働く場所を提供する取り組みは興味深かった。このような例を紹介するのは意義のあることだと思う。ふるさと納税のような奨学金があってはどうかという視聴者からの意見は、実現可能かどうかは別として、具体的で明るい提案でよかった。引き続き奨学金や教育の問題について取り上げていってほしい。

○　奨学金制度の実態を知ることができるよい番組だった。糸井アナウンサーの 211 万 5,000 円という奨学金の返済金額と、薬剤師になるために奨学金を借りることを決意した学生の涙がこの問題の深刻さを表していたと思う。視聴者から寄せられた意見の中に、「貧困の連鎖を止めるには、子どもたちに借金を背負わせるしかない」とい

う意見があったが、真意がわかりづらかった。借金を負わせるしかない現状を打開するために支援が必要なのだとアナウンサーが補足できればよかった。学費が安い大学を紹介する高校の取り組みを知り、大切なことは子どもたち一人一人の状況を鑑みた支援なのだと感じた。重いテーマだっただけに、この進路指導や学内で働き場所を提供する取り組みに希望を見いだせたのはとてもよかった。

（ＮＨＫ側）

さまざまな切り口のあるテーマだったので、冒頭でどこを議題にするのかを明確に提示できればよかった。意見は今後の参考にさせていただく。

○　６月１日(金)の「ほっとニュース北海道」で、釧路市の住宅街にエゾシカが出没した様子を紹介していた。ただかわいいというだけでなく、シカは日没や夜明けなど静かな時間帯に道路に飛び出すケースが多いと注意喚起していたのがよかった。

○　６月２日(土)のＮＨＫスペシャル「ミッシングワーカー　働くことをあきらめて…」を見た。「ミッシングワーカー」ということばを初めて知り、４０代、５０代で長期間、無職の状態に陥っている状態の人が 103 万人もいることに衝撃を受けた。この問題を取り上げ、とても丁寧に取材していたことに感銘を受けた。番組の最後で取材協力者に感謝の意を告げていたのもよかった。

○　失業者を上回って、ミッシングワーカーが 103 万人もいることにとても驚いた。中小企業、特に地方の中小企業が人手不足に悩んでいる中で、このような人たちに中小企業で働いてもらう状況を作ることができればよいのにという思いで見た。このミッシングワーカーと中小企業の人手不足は密接に関わっている問題だと思ったので、中小企業の人手不足についてもぜひ取り上げてほしいと思った。

○　５月１８日（金）の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で、西城秀樹さんの訃報が伝えられていた。カレーのコマーシャルの映像が放送されており、とても驚いた。あのコマーシャルは時代を象徴するものだと思うので、放送したのはすばらしい判断だったと思う。

（ＮＨＫ側）

訃報は故人が活躍した時代を語るニュースでもあり、あのコマーシャルをそのまま流さないと当時の雰囲気が伝わらないと判断したのだと思う。単なる商品の宣伝にとどまらず、世相を表すものであるかどうか、今後もそれぞれの事例に合わせて判断していく。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

平成３０年５月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、議事に先立ち、空席となっている副委員長の互選を行い、新しい副委員長に井田芙美子委員を選出した。

議事はまず、「平成２９年度北海道地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル「歴史は続くよ恵みの浜に～石狩湾～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	小林米三郎	((株)小林本店・小林酒造株式会社　代表取締役社長)
副委員長	井田芙美子	((株)いただきますカンパニー　代表取締役)
委　　員	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	蛭田亜紗子	(小説家)
	丸藤　競	(函館市地域交流まちづくりセンター　センター長)
	村田　博	((株) 村田商店　代表取締役)
	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)

（主な発言）

＜北海道中ひざくりげ　松浦武四郎スペシャル
「歴史は続くよ　恵みの浜に～石狩湾～」
(総合　４月２７日(金) 後 7:33～7:58　北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　久しぶりに「北海道中ひざくりげ」を見たが、郷土愛が感じられ、視聴者が温かい気持ちになれる内容だった。松浦武四郎が何に興味があったのかを食という切り口で伝えていたのはよかった。ルッツという珍味がどのようなものなのか全く想像できなかったが、番組を見て食べてみようと思った。旅人の鈴井貴之さんが朝市を訪れたとき、しけで商品があまり並んでいなかったが、日を改めて取材していたのがよかった。しかし、改めて取材した日も天気が悪く、魚はたくさん並んでいたが人が少なかったので、もう少し活気がある日に撮影してほしかった。少し気になっ

たのは、鈴井さんが旅をしているのを見ると、別の番組を想起してしまうことだ。ただ、「北海道中ひざくりげ」の視聴者の年齢層は高めだと思うので、あまり気にならないのかもしれない。

○　海の幸に恵まれ、新鮮な海産物を驚くほど安く売っている朝市が札幌近郊にあることを知り、行ってみたいと思った。一方で、これほど豊かな海があるにもかかわらず人口が少ないことに、北海道の地域の厳しさを感じた。鈴井さんが旅人として出演していたが、有名なタレントを起用したわりには少し盛り上がりに欠けた。また、厚田と松浦武四郎、旅人の鈴井さんとの間にそれぞれ関係性があったのであれば、番組の中で説明できればよかった。また、「松浦武四郎スペシャル」の初回として、なぜ石狩湾を選んだのかを教えてほしい。しけで水揚げがなかった日に鈴井さんが港を訪れていたのは、もったいなかった。見た目が異様なルッツと、それを拾う人たちの笑顔が対照的で印象に残った。また、ルッツは韓国で食べたが苦手だったと言っていた鈴井さんが、厚田のルッツをおいしそうに食べていたので、厚田のものが特別おいしい理由を詳しく伝えてほしかった。最後のニシン漁師たちの話は、ニシンを本当に大切に思う地元の人たちの気持ちが伝わってきたが、ニシンの放流を始めた理由をもう少し詳しく知りたかった。

○　「松浦武四郎スペシャル」ということで、松浦武四郎にまつわるさまざまなエピソードや記録を紹介しており、北海道命名 150 年目にふさわしい番組だった。今回は、アナウンサーではなくタレントの鈴井さんが旅をしていたが、どのくらい効果があったのかが気になった。鈴井さんのファンはたくさんいると思うので、新たな層に見てもらうきっかけになったと思う。地元の人との和気あいあいとした会話は、鈴井さんだからこそ引き出せたものだと感じた。ただ、鈴井さんはいつもテレビで見るより真面目な雰囲気で、少しもの足りなかった。また、訪れた地域の魅力について、鈴井さん独自の目線でもっと伝えてほしかった。北海道博物館の学芸員である三浦泰之さんが松浦武四郎について解説していたが、少ししか出演していなかったのが残念だった。もう少し一緒に旅をすれば、より深く松浦武四郎について伝えられたと思う。お正月用のかずのこを買ったという人がいたので、いつ撮影したのかが気になった。４月ごろに撮影したようだったが、かずのこの印象が強くて混乱したので、コメントでもう少し説明できればよかった。石狩湾にしんきろうが現れるという話は知らなかったので、とても興味深かった。

（ＮＨＫ側）

今年度の「北海道中ひざくりげ」は、今年が北海道命名 150 年目ということで、松浦武四郎をテーマにしている。旅人もアナウンサーではなく、今回

の鈴井さんを始め、演劇ユニット「ＴＥＡＭ　ＮＡＣＳ」のメンバーなどが務める予定だ。松浦武四郎の足跡をたどって150年の歴史を味わってもらうとともに、より幅広い世代に番組を見てもらうことを目的としている。「松浦武四郎スペシャル」の初回に石狩湾を取り上げたのは、松浦武四郎が石狩湾を北海道を巡る旅の拠点と考えていたためで、初回に鈴井さんに出演してもらった理由は、鈴井さんが出身地である赤平市に在住し、北海道の歴史や地域の人たちとの交流をとても大切にしていて、「北海道中ひざくりげ」の番組趣旨に合っていると思ったからだ。鈴井さんは、とてもうまく地元の人とコミュニケーションをとり、おもしろいシーンが多かったので、編集するのがとても難しかった。「北海道中ひざくりげ」の主役は地域とそこに生きる人たちであるということを念頭に、旅人のよさを生かすことも考えた。厚田の朝市についてだが、朝市は水揚げがないと開かれず、鈴井さんが訪れた日は朝市がなかった。そのため、後日改めて撮影したが、取材期間中はずっと天気が悪く、撮影の日も人が少なかった。しかし、水揚げがあり港に活気があったので、そこを優先した。韓国と厚田のルッツの違いについては、詳しく説明するには根拠が足りず、鈴井さんのコメントだけを放送した。かずのこの話題については、４月に正月用のかずのこを買っているということがとてもおもしろかったので放送したが、混乱を招かないようにもう少し丁寧に説明すればよかったかもしれない。学芸員の三浦さんについては、放送した部分以外にも撮影を行っていたが、今回は２５分という放送時間の中で何を優先するかを検討した結果、あの分量になった。厚田の漁師の話についても、放送時間の関係であまり詳しく紹介することができなかった。しかし、「北海道中ひざくりげ」は地域の人たちが主役ということを考えると、もう少し丁寧に説明できればよかった。

○　旅人を鈴井さんが務めていたが、番組の雰囲気と合っていて違和感なく見ることができた。今年度はアナウンサーではない人が旅人を務めるということで、新しい風を吹き込んでくれることを期待している。松浦武四郎の日記のルッツの絵がおもしろかったので、次回以降もさまざまなものを紹介してほしい。しんきろう仲間の集まりや、ニシン漁師の親子の話題がとても興味深かったので、もう少し詳しく取り上げてほしかった。全体的にほのぼのとしていて、楽しく見た。

○　旅人を鈴井さんやＴＥＡＭ　ＮＡＣＳのメンバーが務めることは、地域の人が主役であるという「北海道中ひざくりげ」の趣旨と矛盾するのではないかと思う。番組の中で、ルッツというのはユムシであると説明していたが、ユムシが何なのかを説明してほしかった。今回は松浦武四郎と特別な旅人という２つの新しい要素があ

ったが、生かしきれていなかったと感じた。特に、松浦武四郎について説明するために三浦さんが出てきたが、出演時間がとても短くもったいなかった。「松浦武四郎スペシャル」と銘打つのであれば、もう少し関連性があったほうがよいのではないかと思った。

○　全体として、とても楽しんで見ることができた。鈴井さんを旅人に迎えることで新しい変化があり、とてもよい仕上がりになっていた。南こうせつさんが歌う番組テーマ曲の「北の旅人」が流れると懐かしい気持ちになった。音楽が、新しい旅人という変化を番組にうまく溶け込ませる一助になっていたと思う。鈴井さんがルッツのことを苦手だと言っていたが、アナウンサーだとあそこまではっきり言わないだろうと思う。苦手という発言があったことで、食べてみておいしかったという感想に説得力が増し、とてもよいシーンになっていた。ニシン漁師の親子の話は、タイトルの「歴史は続くよ」という意味がよくわかる構成になっていてよかった。ニシン漁の復活によって、若者たちが厚田に帰ってくるようになったという話はとても希望が持てた。１月１９日(金)の北海道クローズアップ「若者大流出～空前の“売り手市場”の陰で～」で、鈴井さんが若者の就労や定着に深い関心を寄せていたので、よい人選だと感じた。

気になった点は、松浦武四郎の印象が薄かったことだ。番組の中で、松浦武四郎に関するさまざまな情報を紹介しているが、番組を見終わったあとにほとんど印象に残らなかった。視聴者は旅人である鈴井さんに感情移入すると思うので、鈴井さんが松浦武四郎をどのようにとらえているのか、足跡をたどって何を感じたのかを伝えられればよかった。さらに、松浦武四郎の人柄をもっと知ることができるような場所を訪ね、旅人が松浦武四郎に思いをはせるような場面があれば、松浦武四郎が身近に感じられたと思う。

（ＮＨＫ側）

松浦武四郎は風景や食べ物など、あらゆることを記録しており、膨大な数の資料を残しているので今後も紹介していきたいと思っている。旅人については、主役が地域の人ではなくなってしまうという部分は少なからずあると思うが、番組の読後感として、「旅人がおもしろかった」ということではなく、「よいところだった」と思ってもらえるようにしたいと考えている。ルッツというのはゴカイやミミズの仲間だが、「浜の宝物」という言葉とうまく合わないと感じたので、今回は説明を割愛した。「松浦武四郎スペシャル」と銘打っているので、今回は旅のさまざまなシーンの入り口で、松浦武四郎について触れていたが、いったん地域の話が始まってしまうと、それが松浦武四郎とどのようにつながっているのかを説明することができなかった。ま

た、足跡をたどっての旅人の感想も伝えられなかったので、次回以降については丁寧に伝えていきたい。

○　全体として非常に好感を持って見た。ただ、「地域」「松浦武四郎」「特別な旅人」という３つの主役級のテーマがあったので、そのバランスがとても難しかったと思う。私はあまり歴史に興味がないので、番組の中で紹介されている松浦武四郎の情報だけで十分に楽しめたが、歴史が好きな人であれば、確かにもの足りない部分があったかもしれない。この番組のよい点はとても安心感を持って見ることができることだと思う。特に、音楽の力は大きいと感じた。鈴井さんやＴＥＡＭ　ＮＡＣＳのメンバーが旅人として出演することで、視聴者の年齢層も広がると思う。かずのこの話題について、余計な憶測が働きすぎてしまった。とてもおもしろいコメントではあったが、放送する必要があったのか疑問に思った。また、漁師の日常の風景が自然と切り取られており、表情が生き生きとしていてよかった。今後の放送についても、どこに行くのかとても楽しみにしている。

○　アナウンサーが旅人だったときの落ち着いた雰囲気とは異なり、旅人の鈴井さんが喜怒哀楽を素直に表していて、新鮮な気持ちで見た。特に、ルッツを食べる前と食べた後の反応の違いが際立っていておもしろかった。学芸員の三浦さんが持ってきたフリップが少し見づらかったので、工夫したほうがよかった。松浦武四郎が書いた「石狩日誌」や「十勝日誌」が紹介されていたが、訪れたところがせっかく日誌にまとめられているのであれば、番組の最初で「今日は『石狩日誌』からスタートです」というようなコメントを入れて、よりうまく松浦武四郎と結びつけられればよかった。今年度は旅人が毎回変わるということだったので、より多くの人に知ってもらえるように新聞などで誰がどこを訪ねるのかをしっかり伝えたほうがよいと思う。

（ＮＨＫ側）

今年度は旅人が毎回変わり、それぞれ個性も全く異なると思うので、そのつど旅人に合わせてバランスを調整していきたいと思う。とても訴求力のある人たちが旅をしてくれるので、このチャンスを最大限に生かしていきたい。より多くの人に知ってもらえるように、広報にも力を入れて取り組むように心がける。日誌についてだが、とても魅力的な資料なので、次回以降も工夫して紹介していきたいと思う。ただ、例えば石狩に関する記述が「石狩日誌」だけに書かれているわけではなく、複数の資料に記されているので、１冊だけにこだわって番組を制作することは断念した。

＜放送番組一般について＞

○　４月２８日(土)のドラマ　新十津川物語・アンコール　明治編・第１部「北へ行く旅人たち」(総合 前 10:05～11:36 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)と５月５日(土)の明治編・第２部「大地に立つ」(総合 前 10:05～11:37　北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は、当時を映像の中で丁寧に再現しようという意気込みが伝わってきて、引き込まれた。林隆三さんの演技がとてもよかった。江口洋介さんが白いスーツに長髪で登場して、この時代にこんな人がいたのか疑問に思ったが、華があってよかった。大正編、昭和編でどのように物語が展開するのか、とても楽しみにしている。

○　北海道命名 150 年目を機に、「新十津川物語」のようなすばらしいドラマが再放送されることは、テレビを見るよいきっかけになると思う。

４月２８日(土)のコズミック☆フロント　１０ｍｉｎ.「北海道　陸別町　日本一寒い天文台」(総合 前 11:37～11:47 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は、もともとＢＳプレミアムの番組だが、このように総合でも見る機会があるとＢＳの番組に興味を持つきっかけになると思う。雪原と星空がとても美しく、ＮＨＫだからこそ撮れるすばらしい映像だと思った。「銀河の森天文台」は知っていたが、天文台ができた経緯を初めて知り感動した。「日本一寒い町」という表現があったが、その理由を「全国最低を記録したこともあります」と説明していて気になった。確かに陸別町は「日本一寒い町」をうたっているが、もっと明確な理由があるのではないかと思った。

○　５月１１日(金)のいくぞ～！北の出会い旅「見どころ満載！春の旭川周辺で魅力を探す」(総合 後 7:30～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は、２日間にわたって旭川周辺を旅していた。２日目は和やかな雰囲気でとてもよかったが、１日目の出演者の態度が気になった。地域の人が懸命に話しているときに、話を聞かずに歩き回っていて違和感を覚えた。

○　吉幾三さんの周りを優しく包み込むような人柄が視聴者をほっとさせる番組だと思う。「旭川周辺」というタイトルのとおり、旭川市だけでなくさまざまな町に焦点を当てており、新しい発見があった。旅をすることのよさがとても伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

吉さんはとても温かい人で、北海道への愛情も深い。その人柄が番組を通して伝わっていたのはよかった。

○　５月１２日(土) 知っとく北海道「とことん！上川エリア　上川・上富良野」(総合 前 10:30～10:31.31、10:55～11:20 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。長野県で震度５弱の地震が起きたため中断があり、短縮されたにもかかわらずとてもよくまとまっていた。今回は短いと感じたが、本来の５０分は少し長すぎるのではないかと思う。上富良野町のサイクルラックの話は町の人たちの優しい人柄を感じさせて、とてもよいところに注目したと思う。また、５年前のサイクリングイベントを一過性のものとして終わらせず、根づかせる努力をしていることが、番組で取り上げられたことによって、さらに盛り上がるのではないかと期待を感じさせた。食や風景ではなく、地域性を感じさせる話題を取り上げていたのがよかった。２つの町で同時に新しい酒づくりの動きがあるのが興味深く、働いている人の様子が見える酒蔵で「行動展示」という言葉を引き出したのがよかった。ぜひ訪れてみたいと思った。また、お酒が観光客向けなのか、それとも地元の人をターゲットに作られているのかが気になった。

○　地震のニュースで中断されてしまったことは本当に残念だった。伝えきれなかった情報があると思うので、機会を作って発信してほしいと思う。お笑いコンビのペナンペパナンペについて説明がほとんどなく、テロップも出ていなかったのが残念だった。

（ＮＨＫ側）

地震により番組が短縮し、データ放送が実施できなかったことは残念だった。再放送では、本放送で放送できなかった部分も含めて再構成して放送する。

○　地震によりデータ放送ができなかったのは残念だったが、内容が凝縮されていて見やすかったので逆によかったのではないかと思う。放送できなかった部分はもったいないと思うが、短くなったことで見ていて飽きなかった。値段を出すのが難しいのはわかるが、せめて問い合わせ先などは紹介したほうがよいのではないかと思う。紹介しないことによって不自然になっているシーンもあったので、柔軟に対応してほしい。上富良野町の自転車の取り組みは、熱意があり未来を感じさせるものでとても興味深かった。

○　冒頭から地震で中断されたのはとても大変だったと思うが、まとまっていてかえってよかったのではないかと思う。データ放送によるそれぞれの地域への投票がなかったので、緊張感なく番組を見ることができた。

○　番組が始まってすぐ、緊急地震速報が画面中央に出てしまい、番組が全く見えなくなった。画面の端に地震情報が出てくることもあると思うのだが、中央に出るときとの違いを教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

地震情報は画面の上の方に出すことや画面を縮小して出すことがあるが、緊急地震速報は緊急性が高いため、画面の中央下に出すことにしている。

○　番組が地震のニュースによって大幅に短縮されたことは、番組を楽しみにしていた視聴者にとって、とても残念なことだったと思う。地震のニュースでは繰り返し同じ映像が放送されていたが、被害もほとんどなかったということだったので、地震発生場所と被害状況を鑑みて、北海道地方は独自で放送してもよかったのではないかと思った。全国一律の規則があるのかもしれないが、同じような映像の繰り返しだったので見ていて疲れてしまった。出演者の中には名前の紹介のテロップが出ていない人がいて、どのような人なのかが気になった。突然の短縮にもかかわらず、番組をうまくまとめられたのはよかった。

（ＮＨＫ側）

震度５弱の地震で２５分程度のニュースになったことについては、該当の地域以外の視聴者の中には通常の番組を見たいと思う人もいたと思う。震度４までであれば、場所や状況によってさまざまな判断があるが、震度５弱以上になると全国一律での放送が原則となる。いつニュースを終了するのかは、あらゆる被害がないことを確認してから判断している。さまざまなところに連絡して被害がないかを確認するのに一定の時間が必要であるため、理解いただきたい。

○　「ほっとニュース北海道」で４月、５月にかけて、ＰＭ２．５（微小粒子状物質）について注意喚起していてよかった。今後も的を絞って重要な情報を伝えてほしい。５月１４日(月)には、自転車の盗難を防ぐために警察がツーロックを推奨していると伝えていた。鍵を１つしかかけていない自転車に、警察が勝手にワイヤーロックをつけており、解錠するには警察署に連絡しなければならないという内容でとても驚いた。

（ＮＨＫ側）

ＰＭ２．５については、国の基準値を超える恐れがあるときや、超えなく

てもとても高い数値になる可能性があるときに注意喚起を行っている。循環器系に疾患のある人は早い段階から影響が出る恐れもあるため、早めの呼びかけを心がけている。

（ＮＨＫ側）

ＰＭ２．５については、「ほっとニュース北海道」だけではなく、データ放送でも伝えている。

○　５月３日(木) のＮＨＫスペシャル「憲法と日本人～１９４９－６４　知られざる攻防～」(総合 後 8:00～8:49)は、とてもよく取材された番組だと思った。特に改憲の議論がなぜ収束に向かったのかを明快に示していて、見応えがあった。

○　４月３０日(月)の「“鉄人”の闘志　永遠に～追悼・衣笠祥雄さん～」(総合 後 5:10～6:00)を見て感動した。2,215 試合連続出場という決して派手ではないが、偉大な記録を達成した衣笠さんを当時特集していたこともすばらしかったが、追悼番組として改めて放送したことに感銘を受けた。

○　５月３日(木)に再放送した、ＥＴＶ特集「平和に生きる権利を求めて～恵庭・長沼事件と憲法～」(Ｅテレ 前 0:00～1:14)は、恵庭・長沼事件の裁判を通して憲法と国家の関係をとてもわかりやすく伝えていた。憲法の理念を実現する不断の努力がどのように積み重ねられてきたのかを丁寧に伝えていてよかった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

平成３０年４月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「ほっとニュース北海道」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

続いて、５月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	小林米三郎	((株)小林本店・小林酒造株式会社　代表取締役社長)
副委員長	豊島　琴恵	(旭川大学短期大学部生活学科教授)
委　　員	井田芙美子	((株)いただきますカンパニー　代表取締役)
	嘉指　博行	(北海道新聞社論説委員)
	齋藤　拓也	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	蛭田亜紗子	(小説家)
	丸藤　競	(函館市地域交流まちづくりセンター　センター長)
	村木　秀雄	(いわみざわ農業協同組合　代表理事組合長)
	村田　博	((株) 村田商店　代表取締役)
	柳谷　君予	(NPO 法人ﾜｰｸﾌｪｱ ｵﾎｰﾂｸ若者ｻﾎﾟｰﾄｽﾃｰｼｮﾝ総括ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ)
	山下　徹也	((株)グローバル経営センター　代表取締役専務)

（主な発言）

＜「ほっとニュース北海道」(総合　４月２日(月)・３日(火))について＞

○　番組の中で道内各局のさまざまな出来事を多く取り上げていた。２日(月)は新年度の始まりということで、新入生や新社会人などの話題を取り上げ、新年度のスタートにふさわしい雰囲気になっていた。特に印象に残ったのは、「イランカラプテプロジェクト」というアイヌ文化を紹介するコーナーで、とても丁寧に伝えていてよかった。「ニュースのポイント」はとてもよいコーナーだが、このコーナーを作った背景を教えてほしい。また、新しいキャスターはこれまでとは違った雰囲気で、新鮮な感じで好感が持てた。このようなニュース番組は、好き嫌いに関係なく道内の情報を得るために視聴するが、いつも見るだけに雰囲気が重要だと思う。新しいキャスターで新しい雰囲気を作っていってほしい。「フィールドキャスター」という人

が登場したが、どのような位置づけなのか知りたい。

○　新しいキャスターに初々しさを感じたが、ＶＴＲの内容とコメントが食い違っていると感じる部分があった。２日(月)に釧路市の水道料金の値上げの話があったが、釧路市だけでなく道内各地が抱える大きな問題だと思った。「世界自閉症啓発デー」のニュースは、大久保友記乃さんと母の昌子さんの努力に感銘を受けた。インタビューの映像が全体的に暗すぎたので、もう少し工夫があればよかった。３日(火)の生乳の流通多様化のニュースについては、出荷先を指定団体以外に切り替えることのよい面に焦点が当てられており、スタジオで短所についても触れてはいたが、もう少し詳しく説明したほうがよかった。ニュース全体を見ると、新しい試みがよいという印象を受けたので、公平性に欠けるように思った。

○　新しいキャスターが入ったことで、出演者同士のやりとりがぎこちない感じがして、少し気になった。インタビューの時に映像が揺れていたので、もう少し工夫ができればよいと思った。キャスターが大きなモニターの前でニュースを読んでいるが、画面が暗い時に影が映ることがあり、少し見づらかった。キャスターはカメラ目線で話しているが、記者がずっと下を向いて原稿を読んでおり、慣れていないせいもあると思うが、最後だけでも目線を上げると説得力が増すと思う。ＶＴＲ中に画面右下の縮小画面にキャスターを映していることが多々あったが、あまり必要ないのではないかと思った。

○　新しいキャスターの２人はとても落ち着いた声質で安定感があり、初回からハラハラすることなく見ることができた。これからおなじみの顔になっていくと思うので、最初に自己紹介があればよかった。「世界自閉症啓発デー」のニュースの中のインタビューは、質問が漠然としていた。滞りなく進んでいたので、事前に質問内容を知っていたのだと思うが、一般の人にインタビューをする場合には、答えを引き出すような質問をするように配慮すべきだと思った。特に、オリンピックの時のアスリートへの質問は答えづらそうだと感じるものが多くあった。相手の気持ちや思考に寄り添い、質問を吟味する必要があると思う。「ほっと中継」のリポーターがときどきくだけた口調で話していたのが気になった。本人に悪気はないだろうと思うが、ニュース番組では少し浮いている感じがした。

（ＮＨＫ側）

「ニュースのポイント」は、日々のニュースでは伝えきれない部分を担当記者独自の視点から深掘りし、視聴者が気になっていると思われることをより詳しく伝えるために新年度から始めた。札幌局の記者だけでなく、道内の

各放送局の記者も今後出演する予定だ。それぞれの視点で、新しい角度からニュースを伝えられればと思う。

（ＮＨＫ側）

生乳の流通多様化のニュースについて、ニュースというのは新しい部分を取り上げることが主眼となるので、どちらの面も同じ分量で伝えることは難しい。しかしさまざまな考えがあると思うので、ある一面の評価にすぎないということを今回はスタジオ部分で付け加えた。

「フィールドキャスター」については、ニュースが起きている現場に行き、よりメッセージ性のあるリポートを伝えることを目的として導入した。名称や役割について、最初だけでももう少し説明があったほうがよかったかもしれない。

インタビュー中の映像の揺れについては、なるべく三脚をつけるようにしているが、その間に対象者が通り過ぎインタビューの機会を逃してしまうこともある。手持ちになっても極力揺れないように心がける。

記者がずっと下を向いて話しているという意見については、キャスターはカメラに原稿が映る装置を使用しているが、これはキャスター分しかないので、記者だけが下を向いて話す形になっている。なるべく原稿を見ずに自分の言葉で話すことができるように訓練をしているところなので、今後に期待してほしい。また、インタビューの質問のしかたについて、具体的に質問したほうがよい人もいれば、あいまいな質問のほうがよい答えが返ってくる人もいる。どのように質問したほうがよいかは、事前のリハーサルなどで把握に努めている。今回は漠然と質問したほうがよいと判断したのだと思う。

（ＮＨＫ側）

新キャスターについて、呼吸を合わせるのはなかなか難しい部分があるが、回を重ねるごとに習熟していくと思う。また、インタビューのしかたについて、何を引き出したいのかということをしっかりと考えながら質問できるように育成に励みたい。

○　さまざまな内容が盛り込まれたニュース番組だと改めて感じた。一方、少し話題が多すぎるかもしれないとも思った。「ほっと中継」など親しみやすい雰囲気のコーナーもあり、全体として好感を持って見た。見逃したのかもしれないが、メインキャスターのフルネームを紹介していなかったように思う。名前の読み方がわからなかったので、自己紹介があればよかった。

３日(火)に、地元のプロバスケットボールチームにＵ１５が発足というニュース

があったが、最後の小学生のインタビューに対するキャスターのコメントの内容に、意図するものと違うのではないかと違和感を覚えた所があった。高速道路の落下物についての中継は、とてもおもしろかった。春に高速道路に落下物が増える理由について、解説があればよりよかった。地元のプロ野球チームの話題で、「心機一転とはなりませんでした」というコメントがあったが、もう少し言葉を選んだほうがよかった。

○　メインキャスターが一新されたが、２人とも緊張しているのが伝わってきた。キャスターの１人が話をしていない時の表情が硬かったので、もう少し柔らかくなると親しみやすくてよいと思った。渡邉唯キャスターがとても明るくて、すてきだった。新人の和田遥リポーターに、最後のほうでメインキャスターの２人が温かく声をかけていたのがよかった。札幌のデパートが営業開始時間を遅らせるというニュースを伝えていた。視聴者は遅くなることでよい印象を受けないと思うが、なぜ開始時間を遅らせることにしたのかを丁寧に紹介し、視聴者に理解を促していたのがよかった。「イランカラプテプロジェクト」というアイヌ文化を紹介するコーナーは、北海道命名 150 年目を盛り上げようという意図が感じられ、とてもよいと思った。アイヌの人が見ても違和感のないように伝えてほしい。保育施設の話題で、「オホーツク海側では初めてとなる保育施設」と伝えていた。企業主導型保育施設が初めてということだが、誤解を生まない表現を心がけてほしい。女子学生会館のリポートについて、「昨日から入居が始まった」という場面で、「顔見知り状態」というコメントがあった。言い間違いだと思うが、キャスターがうまくフォローできればよかった。生乳流通多様化のニュースは、さまざまな意見があり放送の時間も限られているとは思うが、ことばじりなどを工夫して、もう少し違和感を減らすことができればよかった。キャスターのコメントも軽く感じたので、さまざまな背景があることを理解した上でコメントしてほしかった。

○　２日(月)はメインキャスターも替わり、新しい試みも行っている割に、淡々と終わった印象を受けた。それに対して、３日(火)はとてもおもしろかった。やはりニュース番組はニュースの内容で勢いや印象が決まるのだと思った。「世界自閉症啓発デー」のニュースは、自閉症の大久保さんがすばらしい作品を作るということだけでなく、日々の生活の中で、苦しいことがさまざまにあるということが伝わってきたのがよかった。生乳の流通多様化のニュースは、キャスターが最後に負の面についても触れていたが、北海道は一大生産地であることから、もう少し厳しい面に軸足を置いて伝えたほうがよかったのではないかと思った。将来的にも維持できる仕組みなのか、常に厳しい目線で見たほうがよいと思う。手話条例のニュースは、石狩市の先進ぶりがとても興味深かった。条例を作るだけで終わってはいけないと

いうことを伝えていたのもよかった。１つ疑問に思ったのは、石狩市役所に手話通訳者が３人も常駐しているのに対し、利用が年間５０件しかなかったことだ。このようによいシステムの利用が少ないのはなぜなのかを知りたかった。出演者について、気象予報士の浜崎慎二さんの安定感がとても際立っていた。

○　新しいキャスターは、とても初々しい感じを受けたが、回を重ねるごとに慣れていくと思う。多様な意見があると思うが、視聴者の意見を誘導することなく、公平な目線で丁寧に伝えていってほしいと思う。「ほっとニュース北海道」は全体的に丁寧に作られている印象なので、そのまま継続してほしい。

（ＮＨＫ側）

メインキャスターが言い間違えをフォローできなかったことについては、経験が浅く、フォローするまでには至らなかった。日々スキルアップを図っていきたいと思う。「イランカラプテプロジェクト」のコーナーについては、アイヌの関係者と連絡を密に取り合って、アイヌの人たちから見てもよい取り組み、先進的な試みを伝えていきたいと思っている。

（ＮＨＫ側）

生乳の流通多様化のニュースについては、デメリットの部分も含めて、引き続き多角的に取材していきたいと思う。石狩市役所の手話サービスの利用件数の少なさについては、そこに新たな課題があると思うので、機会があればそのような点についても伝えていきたい。春に落下物が多いのは、雪が解けて車の通行量が増えることが理由だが、それについても触れることができればよかった。また、キャスターのコメントについていくつか指摘があったが、今後の参考にさせていただく。

（ＮＨＫ側）

生乳のニュースについて、酪農家の新しい動きが一部政府に認められたことをニュースで伝えられたのはよかったが、いままでの仕組みについても続いてきた理由があるので、そこを伝える必要はあったと思う。多角的な視点で、引き続き取材していきたい。

○　生放送では見られなかったが、違う日に見てもリポートや特集は見応えがあった。最初にメインキャスターの自己紹介があればよかった。キャスターは全体としてバランスがよく、落ち着いて見られた。「フィールドキャスター」については、私もどういう位置づけなのか疑問に思った。普通のリポーターとは違う形で活躍してほし

いと思う。「イランカラプテプロジェクト」のコーナーはとてもよいと思うので、今後もさまざまなことを伝えてほしい。また、岩見沢支局からの中継があったのがよかった。そこに住む人の視点で地元の身近な情報が発信されることは、その地域の人にとってうれしいことだと思う。「世界自閉症啓発デー」の話題があったが、自閉症についてもう少し詳しく説明してもよかった。高速道路の落下物の中継で、落下物を発見したときの連絡先の紹介があったが、運転中にダイヤルすることがないように注意喚起があったほうがよかったと思う。全体的にしっかりとした内容なので、今後もこのままの雰囲気で続けていけばよくなると思う。

○　新しいキャスターから緊張感が伝わってきた。キャスターが話していない時の表情が硬いことと、話すときに微妙に体が揺れるのが気になった。新しいキャスターに替わり、全体としてとても温かな感じがして、「ほっとニュース北海道」というタイトルに合っているのではないかと思った。新しいメインキャスターがどこから来たのか、前任のキャスターがどこに行ったのかが気になりホームページを見たが、更新されていない部分があったのが残念だった。全体としては、それぞれの地域の特徴や旬の話題を上手にまとめている印象だった。限られた時間の中で、たくさんの話題をせわしないと感じさせないために、とても吟味しているのだろうと思った。手話条例や生乳の流通多様化のニュースは、もっと知りたいという気持ちになったので、「北海道クローズアップ」で取り上げられるとよいと思った。「イランカラプテプロジェクト」も新しい話題で、今後に期待したい。

○　２日(月)は新年度にふさわしい話題でまとめられていて、全体として新鮮な感じがした。新しいメインキャスターも落ち着いている印象で、安心して見ることができた。しかし、細かいことを言うと、進行がうまくいかない場面がいくつかあったのが気になった。キャスターが新しくなり、ほどよい緊張感の中で、「ほっと中継」のリポーターのくだけた雰囲気は合っていなかったと思う。生乳の流通のニュースでは、説明や解説が不足していると感じる部分がいくつかあった。出演者について、硬い印象の人と明るい笑顔が印象的な人の対比が目立っていた。この番組は、時間帯的に高齢者層や主婦層をターゲットとしていると思うが、多様な話題をめりはりをつけて伝えており、とてもよいと思う。今後も期待している。

（ＮＨＫ側）

説明が不足していたと指摘されたニュースがいくつかあった。時間が限られているので全てをお伝えすることは難しいが、意見は今後の参考にさせていただく。

○　３日(火)に大樹町のドライフラワー作品展が取り上げられていたが、「作品展開いたグループの代表」という紹介があり、回りくどく感じた。作品展への来訪を促す内容であったのに、なぜグループ名を伝えないのか疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

確かに名前を出したほうが親切だと思うが、必要性という観点から、そのつど名前を出すのかどうかを検討している。

＜放送番組一般について＞

○　３月１６日(金)の北海道クローズアップ「北海道百番附（づけ)」は、北海道に詳しくない人にも興味深い内容だったと思う。100 年前から作り続けられているお菓子があることに驚いた。お菓子が残り続けている理由や途絶えてしまった理由が丁寧に説明されていて、とても好感を持った。過去の映像や資料、インタビューを織り交ぜて歴史をたどり、時代の移り変わりを伝えていたのがよかった。解説も興味深く、テーマは地味だがおもしろかった。

○　100 年前のランキング本という言葉にとても引きつけられた。とても丁寧な取材だったということはよくわかるが、世代的にあまり身近でないお菓子が取り上げられていたので、興味を持って見ることができなかった。

○　とても興味を持って見た。よくあるランキング番組かと思っていたが、困難に直面したときの人の行動を描いたドキュメンタリーになっていて感動した。旭川の豆菓子の話で、人気商品だった砂糖菓子よりも無添加で地味な豆菓子を選んだことが今につながっているというのが興味深かった。豆菓子を食べている子どもたちの笑顔と感想のコメントがとても印象的だった。倒産してしまった製菓会社の創業者の孫が、高級チョコレートの専門店を成功させたという話があったが、なぜ倒産前に新しい商品開発に取り組まなかったのか疑問に思った。また、このチョコレートの専門店に興味を持った人は多くいたと思うので、店名を伝えてほしかった。名前を出すかどうかにさまざまな基準があることはわかるが、視聴者に不親切ではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとして企業名などを出すかどうかにはさまざまな基準があり、そのつど制作責任者が検討している。確かにチョコレートのお店に興味を持った人は多いと思うので、今後はいただいた意見も踏まえて検討していきたい。

○　最初から最後まで興味を持って見た。食べ物以外の番付もとても気になった。また、自分の住む地域がランキングでどこに入っているのかについて、興味が湧いた。

○　大変興味深い番組だった。糸井羊司アナウンサーが実際に現地に赴くなど、行動的で好感が持てた。内容が替わるタイミングで、子どもの声でタイトルコールが入っていて効果的だった。旭川の豆菓子や江別名産のモチは、その地域の長い歴史を感じさせた。一番印象的だったのは、倒産した製菓会社が、現在の高級チョコレート専門店につながっているということだった。食べ物の番付にはお菓子が多く入っていたが、紹介されたのが３つだったのは残念だった。３つしか紹介しないのであれば、冒頭にそのことを伝えたほうがよかった。ほかの番付にも興味があるので、ぜひ続編を期待したい。

○　４月１３日(金)の北海道クローズアップ「雪辱果たせ！ファイターズ」を見た。多くの評論家たちが北海道日本ハムファイターズを最下位と予想する中で、「優勝しか目指していない」という栗山英樹監督の強気な発言が印象的だった。自分の信念をはっきりと伝えられること、さらにその信念を実際に行動に移していることがすばらしいと思った。

（ＮＨＫ側）

栗山監督のインタビューが日本ハムのファンだけではなく、一般の視聴者の心にも響くように意識して制作した。

○　私は日本ハムの熱烈なファンというわけではないが、栗山監督のインタビューはとても興味深かった。日常生活においても生かせるような内容で、４月という放送のタイミングもよかったと思う。

○　栗山監督のインタビューは、自分自身の立場と重なり合う部分があり興味深かった。今後は勝っていても負けていてもしっかりと応援していこうと思った。

○　放送のタイミングがよかった。今回から番組のロゴやテーマソングが替わっており、柔らかい雰囲気になったと感じた。清宮幸太郎選手の中学生の時のＶＴＲがあ

ったが、当時から注目されていたことや、インタビューでの堂々とした受け答えに驚いた。北海道民にとって日本ハムは共通の財産であると思うので、今後も番組を制作してほしいと思う。それと同時に、サッカーやバスケットボールのプロチームについても同じ道民共通の財産として、対等に取り上げていくことを期待している。ただ、スタジオゲストが日本ハムと関連する人ではなかったことに違和感を覚えた。

○　３月３日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ「水がうるおす命の楽園～門脇麦がゆく釧路湿原～」(総合 前10:05～10:48北海道ﾌﾞﾛｯｸ)と、知っとく北海道「とことん釧路エリア！鶴居・厚岸」(総合 前10:55～11:45北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。内容が重なっているように感じたので、これを連続して編成した意図を教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

１～３月は道東エリアを特集する月間としていたため、道東エリアを取り上げた番組を連続して編成した。「水がうるおす命の楽園」は紀行番組、「知っとく北海道」は２つの町を比較したバラエティ番組という住み分けで編成した。

○　４月７日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！選「函館山」については、函館山の特徴的な動植物を見ることができ、映像的にも内容的にも魅力的な番組だった。

４月７日(土)の北海道ＬＯＶＥテレビ　英雄たちの選択・選「北の大地と民を守れ！　松浦武四郎・北海道の名付け親」(総合 前10:30.30～11:29.30北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。「英雄たちの選択」は事実を放送するだけではなく、さまざまな専門家たちが独自の視点から、そのときの主人公の気持ちや考えを探るところがおもしろい。司会を務めている歴史家の磯田道史さんが松浦武四郎のことがとても好きなのが伝わってきた。改めて松浦武四郎についてもっと取り上げてほしいと思った。また、この時代のアイヌとの関係や歴史について、今しっかりと見つめなおさなければならないと思った。

○　４月７日(土)ＮＨＫスペシャル「＃失踪　若者行方不明３万人」を見た。実態として３万人を超えることに驚いた。顔を隠してはいるが、失踪している若者に番組に出演してもらっていることに感心した。親が見れば気づくのではないかと思った。昔は若者の非行や犯罪が問題になっていたと思うが、今は失踪が問題になっていることに、時代の変化を感じた。また、失踪している若者を住まわせていた人へのインタビューも、しっかりと質問を投げかけて答えを引き出しており、よく取材されていた。

○　３月２５日(日)の目撃！にっぽん「人生にささげる一曲～音楽療法士　命の記録～」を見て、音楽療法士が末期の患者さんと向き合う大変な仕事だということを初めて知った。取材対象者との信頼関係があったからこそ制作できた番組だと思う。「目撃！にっぽん」は有名人だけでなく、地方で活躍している一般の人にも目を向けるところがすばらしいと思う。

○　４月１日(日)のさわやか自然百景「北海道　利尻島　冬」は、ＮＨＫでなければ見られないような貴重な映像があってよかった。

○　４月１３日(金)の「チコちゃんに叱られる！＃１」がおもしろかった。あまり期待していなかったが、チコちゃんの表情やコメントがよかった。ただ、放送の時間帯はもう少し遅くてもよいのではないかと思った。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」は、懐かしさを感じる部分が多くあり、出演者や主題歌も好感が持てる。主人公が胎児の時から始まったのは驚きだった。映画のパロディと思われるシーンがあったが、演出が過剰にならないように注意してほしい。今までにない「連続テレビ小説」になりそうだと期待している。

○　３月１５日(木)の「マイクロフォンの魔法～人生を録音する～」(Ｅテレ 後 10:00～10:44.30)は、とても感動的な内容で、何度も涙ぐんでしまった。対話の持つ力や録音ブースの持つ不思議な力を感じた。

○　３月１７日(土)の「１００分ｄｅメディア論」(Ｅテレ 後 11:00～18 日(日) 前 0:40)は、メディアのことを強く批判するような場面もしっかり放送していてよかった。

○　４月４日(水)のＢＳ１スペシャル「インパール　慰霊と和解の旅路」(ＢＳ１ 後 9:00～9:49)を見た。インパール作戦に参加した日本兵の娘で、英国人と結婚したマクドナルド昭子さんの目を通して激戦地の跡をたどっていたのがとてもよかった。

○　４月７日(土)「超絶景を撮れ！ドローンＸ～北海道・道東編～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:30～11:29)は、いままで見たことのないような上空からの映像で、とても楽しめた。映像を流す前に撮影のポイントを説明していて、映像のすばらしさがより伝わってきた。「超絶景」という文字が何度も出てきたが、あまり必要ないと思った。別の地域のものも見てみたいと思ったので、期待している。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局